

社 会 科 教 室

第 166 号

平成 2 9 年 度

香川県小学校教育研究会社会科部会

香川県小学校社会科教育研究会

人工知能の台頭と人間力

近年、情報やグローバル化といった社会の変化が、人間の予測を超えて進展するようになっていきます。とりわけ、最近では第4次産業革命ともいわれる、進化した人工知能が社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされています。

2017年5月、囲碁ソフト「アルファ碁」が、世界最強とされる中国人棋士に勝利したとのニュースは、世界中に衝撃を与えました。人工知能が人間の能力を超えやがて人間に取って代わる時代が来るのではないかと思います。

先般、人工知能研究のトップランナーで東京大学大学院准教授の松尾豊氏の講演を聞く機会に恵まれました。氏によると、高精度の画像認識が可能になったことにより、機械やロボットが担う作業が飛躍的に増えることが見込まれ、農業や建設、食品加工といった人手不足の分野で有効である。また、医療などの専門分野においても、ベテランの名医よりも的確な治療方針を示すかもしれないと述べられました。しかし、機械を使う仕事、目的や価値を設定する仕事、人と直接関わる仕事は、人間でなければできないと指摘され、我々は、どういう社会をつくりたいか、幸せで持続可能な社会とは何かを決めることが今後ますます重要であると強調されました。

ところで、人工知能がいくら台頭したとしても、それでも必要な人間力とはいったいどのようなもののでしょうか。経済産業省では、社会人基礎力として、①前に踏み出す力（物事に進んで取り組み、失敗しても粘り強く取り組む力）、②考え抜く力（疑問をもち、考え、問題を解決し新しいものを生み出す力）、③チームで働く力（多様な人とともに、目標に向かって協力する力）の3つの能力を上げていきます。

社会において、何かのプロジェクトを成功に導くためには、率先してアクションを起こすことが大切です。創造力を振り絞ることも必要であるし、何よりチームのメンバーと協力することが必要です。その中でも特に、積極的なアクションに必要な主体性、チームでの協力に必要な柔軟性は、「人間力」とも言い換えてもいいのではないのでしょうか。

さて、平成29年度、社会科部会（香社研）では、将来の予測が難しい社会の中でも、子どもたちが、新しい価値を創造し未来を切り開いていけるよう、現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習のあり方について、全国大会の成果を踏まえつつ、各郡市の特色を生かしながら研究に取り組んでまいりました。

研究の進め方として、各郡市ごとに、現代的課題の「単元」を決めて内容研究、教材開発を行い、社会の見方・考え方、学びの過程を入れた単元を構想して授業実践を行いました。その取組を夏季研修会や定例研修会において、各郡市の研究主題に即しながら実践提案発表をしていただきました。その成果を県教委委託事業「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくり」のリーフレットづくりに各郡市から実践事例を提供していただきました。

平成30年度は、10月25日（木）に、まんのう町立満濃南小学校において香小研大会が開催されます。研究発表会が盛大に開催され大きな成果を上げることができるよう、全県を挙げてバックアップしてまいりたいと存じます。

また、学習指導要領が改訂され、大きな成果を上げた平成28年度全小社香川大会を記念して、「研究図書」を刊行する予定です。全国に、伝統ある香社研の研究の深さを情報発信してまいりたいと存じます。

結びに、平成29年度の本会の研究活動に対して、ご指導、ご鞭撻を賜りました教育委員会、先輩の先生方、関係各位に深く感謝申し上げます。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科研究会
（部）会長 亀井 伸治

平成29年度事業報告

【定例研修会】

○ 6月定例会

月 日：6月10日(土) 13:00～16:05

場 所：高松市立十河小学校

第4学年「自然災害からくらしを守る」

授業者：藤澤 大地先生(高松市立十河小学校)

提案者：仁科 大成先生(高松市立栗林小学校)・鶴羽 美緒先生(高松市立十河小学校)

指導者：河田 祥司先生(高松市総合教育センター指導主事)

○ 7月定例会

月 日：7月8日(土) 9:30～12:00

場 所：岡田コミュニティーセンター

第3学年「農家の仕事」

提案者：池田 和樹先生(丸亀市立城西小学校)

指導者：河田 祥司先生(高松市総合教育センター指導主事)

香川 佳和先生(香社研 OB)

○ 9月定例会

月 日：9月23日(土) 9:30～12:00

場 所：附属高松小学校 ランチルーム

第4学年「わたしたちの県・県の広がり」

提案者：上嶋 光晴先生(土庄町立土庄小学校)

原井 和彦先生(東かがわ市立白鳥小学校)

指導者：河田 祥司先生(高松市総合教育センター指導主事)

佐藤 正文先生(香社研 OB)

○ 10月定例会

月 日：10月7日(土) 9:30～11:55

場 所：詫間マリンウェーブ

第4学年「わたしたちのくらしをつくる電気を求めて」

提案者：白川 康太先生(観音寺市立観音寺小学校)

守屋 顕 先生(観音寺市立伊吹小学校)

指導者：林 聖士先生(西部教育事務所主任指導主事)

講師：柴田 英明先生(観音寺市教育委員会学校教育課課長)

○ 11月定例会

月 日：10月21日(土) 8:00～11:00 (授業実施の関係で10月21日に11月定例会を実施しました)

場 所：善通寺市立西部小学校

第4学年「香川の発展に尽くすー香川県の未来を見つめてー」

授業者：大木 陽平先生(善通寺市立西部小学校)

提案者：竹森 仁志先生(琴平町立琴平小学校)

指導者：山内 秀則先生(琴平町立象郷小学校 教頭)

○ 12月定例会

月 日：12月9日(土) 9:30～11:40

場 所：坂出市立坂出小学校

第3学年「工場の仕事」

提案者：岡本 敏英先生(坂出市立市坂出小学校)

網野 未来先生(綾川町立昭和小学校)

指導者：唐木 裕志先生(香社研 OB)

佐柳 仁先生(まんのう町立満濃南小学校 教頭)

平成 29 年度 夏季研修会報告

【日程】

平成 29 年 7 月 26 日 (水) 9:30~16:25 会場 高松テルサ

9:30	9:45	10:40	10:50	12:00	13:00	15:00	15:10	16:10	16:25
受付	開会行事	提案発表	移動 休憩	分科会Ⅰ	昼食	分科会Ⅱ	移動 休憩	講演	閉会行事

【開会行事】 9:30~ 9:45

挨拶
来賓挨拶

香川県小学校教育研究会社会科部会 部会長 亀井 伸治
香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 北堀 宏

【提案発表】 9:45~10:40

本部提案

現代的な課題に対する資質・能力を育てる社会科学習
～学びの過程（何ができるようになるか）（何を学ぶか）（どのように学ぶか）を
全国大会の成果を踏まえた実践事例で探る～

香川大学教育学部附属高松小学校 教諭 黒田 拓志

高松支部提案

社会的な見方・考え方、生き方を育てる授業づくり
～問題解決的実践学習で授業の日常化を目指す～

高松市立栗林小学校 教諭 仁科 大成

【分科会Ⅰ時程】 10:50~12:00

10:50	11:55	12:00
分科会Ⅰ	提案・討議・指導の一体協議 (65分)	会場責任者総括 (5分)

分科会	授業単元名	授業提案・提案・討議・指導			会場責任者
		授業提案者	提案・討議者・	指導助言者	
第3学年	地域の「文化」の魅力再発見！ 市の様子	高松市立 亀阜小学校 教諭 小松 裕貴	高木 恭子（高・木太小） 池田 康輔（高・栗林小） 古川夕希子（高・牟礼北小） 芦田 優斗（高・牟礼南小） 水口 純（高・附属高松小）	さぬき市立 津田小学校 教頭 亀井 健男	高松市立 庵治小学校 校長 岩崎 正敬
第4学年	香川の「自然災害」対策から地域を見る！ 自然災害からくらしを守る	高松市立 前田小学校 教諭 吉井 孝一	高尾 悠司（高・十河小） 黒 川 浩一（高・香南小） 高木 浩彰（高・勘十郎小） 野口 隆弘（高・一宮小） 轟 秀明（高・附属高松小）	香川県教育委員会事務局 東部教育事務所 主任指導主事 長田 在代	高松市立 一宮小学校 校長 上井 嘉
第5学年	「農家数の減少」から農業振興の方策！ わたしたちの生活と食料生産	高松市立 太田小学校 教諭 中筋 修	石橋奈生子（高・栗林小） 黒川 幸宣（高・牟礼小） 石田 充史（高・弦打小） 戸城 一騎（高・木太南小） 真鍋 長嗣（高・屋島小）	琴平町立 象郷小学校 教頭 山内 秀則	直島町立 直島小学校 校長 三木 正英
第6学年	政治の仕組みを変えて 「くらしの文化」をつくる！ 武士の世の中へ	高松市立 多肥小学校 教諭 吉岡 光平	山下 悠（高・十河小） 加藤 優（高・多肥小） 久 保 祐亮（高・十河小） 造田 和高（木・氷上小） 黒田 拓志（高・附属高松小）	香川県教育委員会事務局 義務教育課 主任指導主事 北堀 宏	三木町立 白山小学校 校長 山下 隆章

【昼食・移動】 12:00~13:00

【分科会Ⅱ時程】 各郡市社研の実践提案発表 13:00~15:00

13:00	14:35	14:55	15:00
各郡市実践提案発表（95分） 各郡市の研究主題に即した実践報告・演習等	指導・助言（20分）	分科会 責任者総括	

現代的な課題に対する資質・能力を育てる社会科学学習をふまえた各郡市の提案発表

分科会	郡市	各郡市の研究主題	提案者	協力者	指導助言者	分科会責任者
A	さ・東	思考力の育成をめざした 学習プランの開発 ～社会科の魅力を体感し、学びを深める授業 の在り方～ 5年「米作りのさかな地域」	東かがわ市立 白鳥小学校 教諭 原井 和彦	正木 優子（東・引田小） 木村 直人（さ・さぬき南小） 山崎 悠（さ・石田小） 梅本 明宏（さ・さぬき北小）	香川県教育委員会事務局 西部教育事務所 主任指導主事 林 聖士	さぬき市立 さぬき南小学校 校長 松浦 隆夫
B	三観	「今」を見つめ、「未来」を拓く 社会科の創造 一基礎的・基本的内容を身に付け、 自ら問いを追究する社会科学学習の展開— 6年「武士の政治の始まり」	観音寺市立 観音寺小学校 教諭 古子 貴将	守屋 顕（観・伊吹小） 白川 康太（観・観音寺小） 片山 大輔（三・詫間小） 藤本 博文（三・上高瀬小）	香川大学 教育学部 教授 伊藤 裕康	三豊市立 上高野小学校 校長 安藤 通
C	坂・綾	主体的にかかわりながら追究する 社会科学学習の創造 一対話の活性化を図る単元構想の工夫— 6年「天皇中心の国づくり」 —国府の里と中央史をつないで考える—	坂出市立 府中小学校 教諭 福田 佳代	河野 富男（綾・宇多津小） 高野 雅信（綾・宇多津小） 山西由里子（坂・林田小） 網野 未来（綾・昭和小）	高松市立 十河小学校 教頭 大嶋 和彦	坂出市立 松山小学校 校長 白川 豊浩
D	丸亀	自立と共生を育てる社会科学学習 6年「頼朝が目指した武士の世の中」	丸亀市立 飯山北小学校 教諭 岡田 直哉	小山 沙織（丸・飯山北小） 櫻井 道芳（丸・郡家小） 和田 早苗（丸・郡家小） 増井 泰弘（丸・郡家小）	観音寺市立 大野原小学校 教頭 合田 雅気	丸亀市立 城東小学校 校長 樋口 昌樹
E	小豆	社会認識を深め、 社会に関わる力を育てる学習 5年「地域をつないで見える日本の水産業」	土庄町立 土庄小学校 講師 上嶋 光晴	塩見 強（小・土庄小） 平林 泰徳（小・土庄小） 佐藤 忠相（小・池田小） 大下亜紀子（小・星城小）	まんのう町立 満濃南小学校 教頭 佐柳 仁	小豆島町立 星城小学校 校長 羽座 則史
F	仲善	人間の営みに学び、 広い視野を育てる社会科学学習の展開 6年「文化をつなぐ室町時代」	まんのう町立 満濃南小学校 教諭 乗松 直樹	大木 陽平（善・西部小） 竹森 仁志（仲・琴平小） 徳増 雅俊（仲・満濃南小） 小野 祐太（善・東部小）	高松市 総合教育センター 指導主事 河田 祥司	琴平町立 琴平小学校 校長 岩崎 保雄

【講演】 15:10～16:10

文部科学省初等中等教育局視学官 澤井 陽介 先生

【閉会行事】 16:10～16:25

高松支部挨拶
副部長挨拶

香川県小学校教育研究会高松支部社会科部会 部長 上井 嘉
香川県小学校教育研究会社会科部会 副部長 樋口 昌樹

参加人数 約210名

【成果と課題】

- 分科会Ⅱで行った提案は各郡市の特色が見られ好評だった。しかし、演習内容や郡市の協力体制に差が見られた。県の研究主題を踏まえた向けた演習となるよう検討したい。
- 現代的な課題に基づいた実践はまだ温度差が見られた。今後、現代的な課題を明確化した実践、研究をより推進していきたい。
- 次年度の香小研大会に向けて研究をより一層深めていく必要がある。

平成 29 年度 香社研フィールドワーク 活動報告

平成 29 年度、香社研フィールドワークは、1 泊 2 日で和歌山県を訪れました。バスでの旅行で、車内では各都市をまたいだ交流が終始なされ、また車窓から見える香川県とは違う景色に感心しきりでした。

本州最南端である潮岬、橋の橋脚のようにみえる橋杭岩、教科書にも掲載されているトルコ軍艦「エルトゥールル号」の海難事故現場を訪れ、そして、世界遺産に登録されました熊野古道を語り部さんとともに歩いて体感することができました。

詳細は以下の通りです。

1 目 的 : ①体験・見学を通して、教材研究を深める。

②教科、世代を問わず香社研や教員同士の親睦を深める。

2 日 程 : 平成 29 年 8 月 19～20 日 (土～日)

貸し切りバスでの移動

一 日 目	8/19 (土)	坂出駅＝高松＝明石海峡大橋＝秋津野ガルデン＝潮岬＝					
		6:20	7:00	12:00	13:00	14:10～30	
二 日 目	8/20 (日)	＝トルコ記念館－トルコ軍艦遭難碑＝橋杭岩＝懇親会 (ホテルにて)					
		14:50	15:30	15:50～16:00	18:00～20:00		
		ホテル＝熊野古道『大門坂ウォーク』――那智大社・那智の滝――					
		8:00	8:30	10:30			
		＝熊野本宮大社＝わたらせ温泉と昼食＝高松駅＝坂出駅					
		11:40	12:40	12:50	14:40	19:50	20:30

3 参加人数 : 29 名

4 各スポット

(1) 8 月 19 日 (土)

秋津野ガルデン

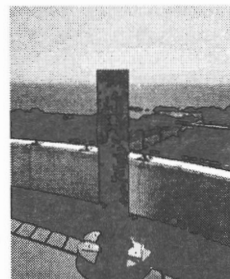


廃校を利用して、地元住民が中心となって運営しているグリーンツーリズム施設にて昼食をいただきました。学校が廃校になるに当たり、その保存に努力した地域住民の皆さんの学校への愛情を感じました。学校を中心として地域住民が一体になることのすばらしさを感じることができました。もちろん、食事もととてもおいしかったです。

潮岬&橋杭岩

香社研のメンバーはついに本州最南端へ到達しました。見渡す限りの太平洋と水平線、海の向こうに思いをはせた昔の偉人たちを感じるひとときを過ごしました。その後、バスで移動し、奇妙な形を残して

いる「橋杭岩」を訪れました。海中にたつその形の不思議さに圧倒されました。弘法大師が作ったという伝説もあるそうで、弘法大師の偉大さを改めて感じました。



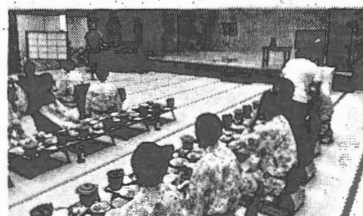
トルコ記念館&トルコ軍艦遭難碑



1980年に起きた大規模な海難事故。トルコが日本に送った特派使節を乗せたエルトゥールル号が和歌山県の串本で台風に遭遇し、暗礁に乗り上げ大破しました。乗組員約650人のうち、69名しか助かりませんでした。69名が助かった背景には、当時の村民の献身的な救助活動があったそうです。自分たちの祖先が発揮した、日本人としての良さを忘れず、後世に伝えていくことで、日本とトルコの友好関係が末永く続けばいいなと感じました。

懇親会

参加して下さった皆様といろいろな話ができた懇親会となりました。初参加の人、何度も参加している人、社会科以外の人、様々な立場の人のお話が聞ける貴重な時間でした。

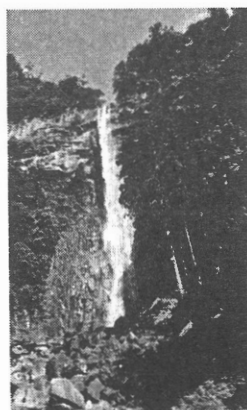


(2) 8月20日(日)

熊野古道～大門坂・那智大社・那智の滝・熊野本宮大社



苔むした熊野古道を歩いていると、神聖な気持ちになります。平安の昔から、脈々と受け継がれてきた信仰の道を歩くと、夏の暑さを不思議と忘れていました。語り部さんのお話を聞きながら歩いた2時間で、熊野古道の歴史を感じることができました。歩いた先には那智大社と那智の滝がありました。信仰の対象となっている滝の迫力は別格でした。



5 旅を終えて

本年度のフィールドワークもたくさんの方が参加して下さいました。旅程の関係で短くなってしまった見学時間をいっぱいに使って、半ば走り回りながら見学をしている先生方を見て、日々の生活の中で、教材を見つけようとする目を育てておくことの大切さを感じました。

終始楽しい時間を過ごすことができたのは、フィールドワーク委員の先生方、そして、参加して下さった先生方のおかげです。ありがとうございました。



第 103 回 全国小学校社会科研究協議会 理事会 報告

1 日時 平成 29 年 10 月 26 日 (木) 午後 5 時～午後 6 時

2 場所 ホテル日航奈良

3 理事会次第

1 開式の言葉

2 挨拶

3 議事

(1) 平成 28 年度 事業報告

(2) 平成 28 年度 会計報告

(3) 平成 29 年度 実施執行状況報告

(4) 平成 29 年度 会計執行状況報告

(5) 次期 全国大会について

第 56 回 埼玉大会

平成 30 年 10 月 25 日 (木) …川口総合文化センター リリア

26 日 (金) …川口市立本町小学校

…川口市立戸塚北小学校

…川口市立鳩ヶ谷小学校

平成 30 年度 大分大会

平成 30 年 6 月 21 日 (木) …ホルトホール大分

22 日 (金) …大分市立西の台小学校

…大分市立大道小学校

(6) その他・協議

4 連絡報告

(1) 奈良大会実行委員長挨拶

(2) 奈良大会第 1 日目概要報告

(3) 奈良大会第 2 日目日程案内

(4) その他・諸連絡 (レセプションの案内)

第 57 回 全国小学校社会科研究協議会研究大会 岐阜大会

平成 31 年度 10 月 31 日 (木) …長良川国際会議場, 岐阜都ホテル

11 月 1 日 (金) …岐阜市立岐阜小学校

…各務原市立那加第二小学校

…大垣市立東小学校

5 閉式のことば

4 その他

※ レセプション等で全小社の論文への依頼が事務局よりあり。今後、検討していく。

大分大会 2 次案内, 埼玉大会 1 次案内については各校に配布済み。

岐阜大会 平成 31 年も香小研大会と重なる。(社会科部会は開催無し。)

多くの参加者に香川大会について賞賛をいただいた。今後も、他県とのつながりを深め、香川の研究をより強くアピールしていく必要を改めて感じた。

第55回 全国小学校社会科研究協議会研究大会 奈良大会に参加して

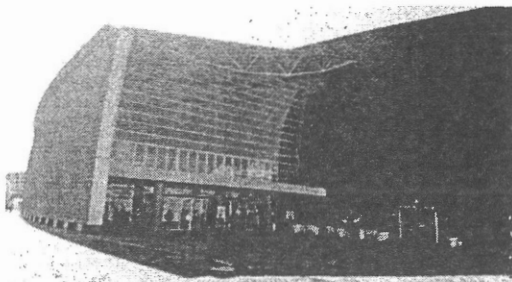
- 1 日時 平成29年10月26日 全体会 会場：なら100年会館
平成29年10月27日 会場別研究会 第1会場（奈良市立飛鳥小学校）
- 2 大会主題

自らの学びを深め、
よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習
— 人の営みに学び、ねり合う学習を通して —

3 全体会について

2月に香川が発信した新しい提案のスタイルはなく。オーソドックスな形の提案・基調講演（東大寺別當）というスタイル。参加者は約350名とのアナウンスはあったが、会場が広かったため、やや寂しかった。

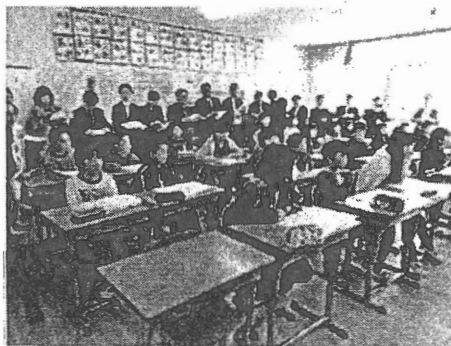
理事会でも昨年度の名古屋大会、香川大会の報告があり、香川大会参加者数報告でざわついた。その後のレセプションでも、他県の先生方より、素晴らしかった顧問の先生方をはじめ、全国各地の先生方より賛辞を頂き、今後も他県とのつながりを大切にしつつ、全国へ発信していく香社研でありたいと強く思った。



4 会場別研究会について

（1）公開授業について

参加者数、約250名やや少ない印象。校内に掲示物もほぼなく、これまでの学びの積み重ねは見られない。教室にも社会科に関係するような掲示は少なかった。本時では、二項対立をさせ、立場を明確にし、話し合う（ねりあう）授業をどの学年でも実践されていた。しかし、本時突然出てくる資料や、教師の揺さぶりによって、子ども達の思考が二転三転している姿が見られ、これまでの学びを再構成しているといった学習ではなかった。その中で、子ども達は自分の考えをしっかりと述べ、考えももっているだけに、単元の問い、何を問題解決していきたいかといった単元レベルでの問いを指導案上は設定されていたが、姿が見られなかったのがやや残念に感じている。



（2）学年別課題研究会について

香川県からは十河小学校高尾先生の提案を行った。全国大会に参加された先生もおられ、当時の様子を改めて検証するという点でも貴重な機会となった。奈良県の提案は、奈良県の研究の素晴らしさの一端が見えた、が、県レベルの研究ではなく、個人研究になっているので、県として研究を広げていく、つないでいくことの大切さを改めて考えさせられた実践であった。

5 次年度に向けて

次年度は、大分大会と埼玉大会がある。今年度同様に、香川県の社会科をしっかりとアピールするとともに、全国の実践から多くのことを学び、さらに香川の良さを全国に広げていくことの大切さ、必要性もあると思う。今後も積極的に参加していくことを心がけていきたい。

1 本年度の課題と年間計画

(1) 本年度の重点事項

○子どもにとって「力が伸びる、伸びが分かる」基礎・テスト。

基礎的な知識・理解、技能の習得と、それらを活用して解決する問題の作成。

○教職員にとって「本当に使える」基礎・テスト

2社の教科書に対応した指導要領準拠の問題作成。（新指導要領を見据えた問題）
分かりやすい解答表記、使いやすい教科書対応ページ表記などの工夫。

(2) 年間計画等

今年度、年5回（前期版・後期版）の編集会議。

年	平成29年									平成30年		
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
作成 予 定		①	②	③								
		H30前期版作成										
				①		②	③					
				H30後期版作成								

【年間計画】

	回	日 時	内 容	備 考
三十年度前期作成	①	5 / 13 (土) 9:00~11:30	担当決め	
	②	6 / 17 (土) 9:00~11:30	協議・作成	
	③	7 / 15 (土) 13:30~15:30	最終の話し合い	■ 会終了後、30年度後期版担当決めを行う。
	提出	7 / 28 (金) 8 / 21 (金)	世話役必着 事務局轟必着	
三十年度後期作成	①	7 / 15 (土) 15:30~16:30	担当決め	
	②	9 / 23 (土) 13:30~15:30	協議・作成	
	③	10 / 7 (土) 13:30~15:30	最終の話し合い	■ 交通費、執筆費受領(5回分) (受領印を持参)
	提出	11 / 6 (月) 11 / 21 (火)	世話役必着 事務局轟必着	

編集作業では、次のように役割分担し、下記の計画にそって行った。

【役割分担】

■ 指導、編集責任者	・・・教頭先生
■ 世話役（司会、原稿取りまとめ、添削等）	・・・1名
■ 編集者	・・・残りの先生方
■ 編集補助【事務、研究】	・・・事務局6名

次年度（31年度版作成に向けて）

・移行措置対応…5年（現行基礎・テストを活用して対応可能）

3年（内容の組み換えが必要 31年度版作成時に配慮）

※参考資料（教育出版HPより）

移行措置期間中の教科書・教師用指導書の扱い

移行措置を行う年度	学 年	移行措置の内容	移行措置期間中の教科書・教師用指導書の扱い
平成30年度 平成31年度	第5学年	「我が国の領土の範囲」の学習に関わる内容を一部追加	現行版の教科書（5上10～13ページ）を使って学習することができます。 参考：学習指導要領「内容の取扱い」 「領土の範囲」については、竹島や北方領土、尖閣諸島が我が国の固有の領土であることに触れること。
平成31年度	第3学年	「地域の安全を守る働き」を第3学年で学習	現行版の教師用指導書に掲載の学習指導案（『授業編』3・4下4～29、36～37ページ『研究編』3・4下70～77、84～88、92ページ）をもとに、現行版の地域副読本などを使って学習することができます。 ※関連して、「地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事」（現行版の教科書3・4上98～105、118～119ページに当たる内容）については、学習を行わないこととなります。

※31年度年間計画例

学期	月	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	月
1学期	4月	1 わたしたちの大好きなまち オリエンテーション 1 わたしの住むまちはどんなまち	4 安全な暮らしとまちづくり オリエンテーション 1 事故・事件のないまちを目指して	1 わたしたちのくらしと国と オリエンテーション 1 日本は世界のどこにある？ 2 日本の地形と気候	1 日本の歴史 オリエンテーション 1 国づくりへの歩み	4月
	5月		2 災害からまちを守るために	3 自然条件と人々のくらし 深める	2 大地に学んだ国づくり 深める	5月
	6月	2 わたしたちの市の様子	5 健康な暮らしとまちづくり オリエンテーション 1 ごみはどこへ	2 食料生産を支える人々 オリエンテーション 1 米づくりのさかんな地域	4 今も受けつがれる空間文化 5 全国統一への動き	6月
	7月	3 働く人とわたしたちのくらし オリエンテーション 1 家で働く人と仕事		2 水産資源のさかんな地域	6 最新の政治と人々の暮らし 7 新しい文化と学習	7月
2学期	8月		2 水はどこから 深める	3 これからの食料生産 深める	8 新しい時代の幕あけ 9 近代国家に向けて	8月
	9月		6 昔から今へと続くまちづくり オリエンテーション 1 古田新田はどこにあった 2 古田新田はどうやってできた	4 工業生産を支える人々 オリエンテーション 1 自動車づくりにはげむ人々	10 戦争と人々の暮らし	9月
	10月	2 工場と働く人と仕事 深める	7 わたしたちの国の安全とまちづくり オリエンテーション	2 世界とつながる日本の工業 3 工業の今と未来	11 平和で豊かな暮らしを目指して 深める	10月
	11月	3 変わるわたしたちの暮らし 2 昔の道具とくらし	1 県の地図をひいて	4 くらしを支える情報 オリエンテーション 1 情報を伝える人々 2 広がる情報ネットワーク 3 情報を生かすわたしたち 深める	2 暮らしの中の政治 オリエンテーション 1 わたしたちの暮らしを支える政治	11月
3学期	12月		2 県と物を生かしたまちづくり	5 国土の自然とともに生きる オリエンテーション 1 自然災害とともに生きる	3 憲法とわたしたちの暮らし 深める	12月
	1月	4 安全な暮らしとまちづくり オリエンテーション 1 事故・事件のないまちを目指して	3 昔のよさを未来に伝えるまちづくり	6 世界の自然とともに生きる オリエンテーション 1 自然災害とともに生きる	4 憲法とわたしたちの暮らし 深める	1月
	2月	2 災害からまちを守るために	4 世界とつながる福岡県 まごめ	3 生活環境を守る人々 深める	5 世界の自然とともに生きる 深める	2月
	3月	深める				3月
総時数		70	80	100	105	

・第3学年3学期の内容と、第4学年1学期の内容が同じ。

・現行の第3学年の3学期に扱っていた内容は扱わないように修正する。

などを配慮した基礎・テストづくりを行う。

（内容の検討は確実に）

・32年度実施に向けた準備・情報収集は次年度より行っていく。

研究主題

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学学習

～「社会に開かれた教育課程」の中での社会科を、教科等横断的な視点から編成し実践する学習で～

香川大学教育学部附属高松小学校 黒田拓志

1 研究主題設定の背景は何か

(1) 2030年の社会の子供の未来からの「教育課程全体の改善」へ

21世紀の社会は知識基盤社会であり、近年、情報化やグローバル化といった社会的変化が私たちの予測を超えて加速度的に進展するようになってきている。このような時代に直面している子供たちは、変化を前向きに捉え、社会や人間としての生き方・在り方を働かせ、変化を受け身に対処するのではなく、主体的に向き合うことが大切である。

このような対応が求められる子供たちに、2030年の未来像を描き、新しい教育の形を希求するのが、今回の学習指導要領の改訂「教育課程全体の改善」なのである。

(2) 教育課程全体の改善の中での社会科の改訂であること

現行の教育課程の編成の基準を示す「学習指導要領」は、各教科等においてどう教えるかという内容と方法の視点を中心に組み立てており、「一つ一つの学びが何であるか」「何のためか」「どのような力を育てるのか」が明確ではない。前述の2030年の子供たちが直面する課題に対応するには、「生きる力」をより具体化し、どのような資質・能力を育てるのかを明確にした「教育課程全体の改善」こそが最も重要なのである。各教科等の縦割りの「何を知っているか」の指導目的にとどまらず、「何ができるようになるのか」の資質・能力に発展する指導が求められており、これが社会科の改訂の研究だけでなく、「教育課程全体」の指導の中での社会科の研究を求める根拠である。

(3) カリキュラム・マネジメントの視点に立つ「学習評価」を実現すること

教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立するためにも、「学習評価」が重要な働きをする。Pは単元構想シートを活用し、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を明らかにする。Dは単元構成や本時案、ルーブリックをもとに、主体的、対話的、深い学びを実現する。Cは職員や会員が子供の姿をもとにして、実践の検証を行う。学習評価の反省として、その先のA(評価を生かした改善)が不十分だったと考える。授業が終わって満足することなく、「どう改善するか」を授業者が明らかにし、翌日の授業改善に努めたい。

2 研究主題を探究する4項目を設定する

〈研究主題を探究する前提になること〉

2030年ごろの課題を乗り越え、未来への創造を目指していくために、「社会に開かれた教育課程」が重要であることが新学習指導要領で示された。これは学校が編成する教育課程を、地域・社会と連携し、そこに見る諸課題に向かい合い、よりよい社会を創り人生を切り拓いていく資質・能力を育てる学校教育目標を設定し、同じ資質・能力の育成を目指す教科等横断的な取り組みを図り、カリキュラム・マネジメントの視点に立って、学校教育目標が目指す資質・能力の育成が着実に日常の授業につながり、家庭や地域につながっていくよう求めている。

そして、学校教育目標の達成を目指して「学びの過程」としての「何ができるようになるか」を明確にし、「何を学ぶか」の学習内容と「どのように学ぶか」を組み立てていくことが求められている。この学校教育目標が目指す資質・能力を達成するよう社会科では、社会的事象について社会的認識と実践的認識による見方・考え方、生き方を働かせて育成していく。この観点に立って、次の研究主題を探究する4項目を設定する。

(1) 「社会に開かれた教育課程」を教科横断的な視点から編成し、資質・能力を育てること。

・従来の縦割りの各教科は、教科ごとの目標がばらばらで、学校教育全体としてどのような人間を育てようとしているのかがはっきりしなかった。そこで、改めて、各教科がその教科の学びを通してどのような人間を育てたいかを「学校教育目標」を意識しながら見直す必要がある。その方策として、総合的な学習の時間や生活科を「軸」とするカリキュラムづくりを提案する。「軸」をつくることで、教科の横のつながりを意識した教科横断的な視点から教育課程を編成し、資質・能力を育てることができる。

(2) 社会認識をひらく「幼稚園・保育所、生活科、社会科の『認識』のイメージと「指導計画」づくり

・幼児教育で育てられたものや、生活科をはじめとする小学校低学年における学習を通して身につけられた資質・能力の上に、社会科において育成する資質・能力を社会的要素の見方・考え方、生き方を働かせていく「社会認識の系統」を明らかにし、「指導計画」を作成する。

(3) 現代的課題による学習内容の工夫・改善を図る

・現代的な課題を見つめ、社会科の学習内容、教材を、教科書による固定化されたものから2030年を見越した新鮮な内容、教材を用いた単元構成による学習を展開する。

(4) カリキュラム・マネジメントの視点に立って学習方法の改善と学習評価の在り方を求める。

・社会との関わりを意識して学習の問題（課題）を追究・解決する学習の充実を図り、学習過程において「主体的・対話的で深い学び」が実現するよう授業方法の見直し、改善を図り、カリキュラム・マネジメントの視点に立つ「学習評価」についても探究する。

3 研究主題を探究する

(1) 「社会に開かれた教育課程」を教科横断的な視点から編成し、資質・能力を育てること

① 「社会に開かれた教育課程」の考え方

まず、学習指導要領の記述を掲げておく。

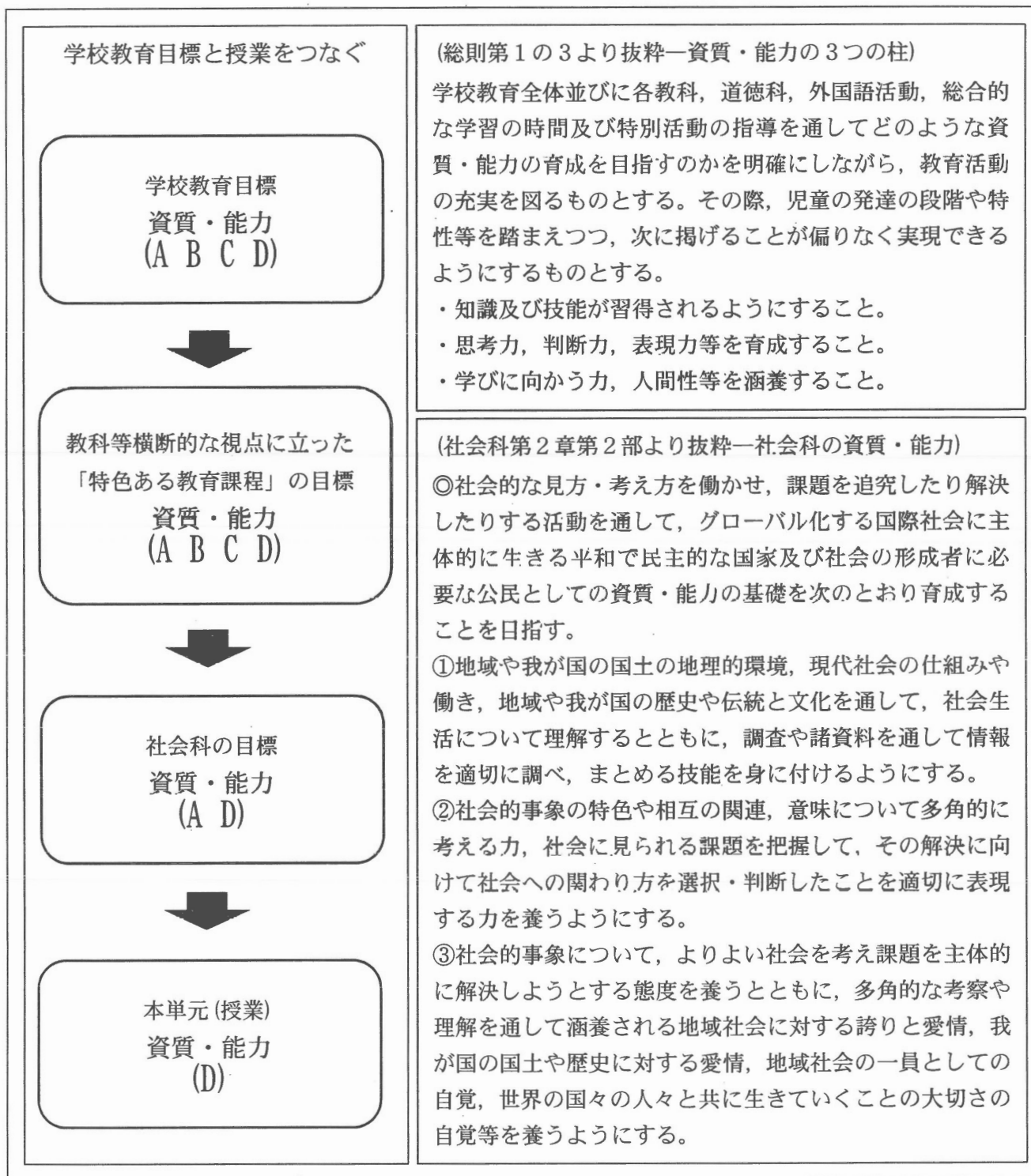
教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にししながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。(学習指導要領全文より抜粋・下線は筆者)

上記の下線にある「社会に開かれた教育課程」の考え方は、教育課程を通して子供たちが変化の激しい社会を生きていくために、必要な資質・能力が何かを明確にし、教科等の本質を踏まえた教科等横断的な視点に立って育成することを目指していくということである。そして、社会とのつながりを重視しながら、学校の特色づくりを学校・家庭・地域が共有する考え方である。

この共有を目指すことは、これまで学習指導要領の改訂の度に提起されてきたことであり、必ずしも目新しいことではない。ただ、これだけ求められてきたことが浸透せずに表層にとどまっていることが課題である。それには、学校教育目標を、育てたい資質・能力の観点から改善し、その目指す資質・能力が、授業の中で育てられる一連のつながりを明確にすること、そして、学校教育目標を達成する特色ある学校管理を学校・家庭・地域が協力・協働して創り上げていくこと、この学校教育目標改善と授

業や特色ある学校づくりで育てる資質・能力の姿を情報発信することなど、具体的教育課程実践の姿を共有することが課題を解決することにつながると考える。

〈資料〉学校教育全体の活動や教科等の学習における資質・能力を作成する場合の基本となるものを次に示しておく。また、学校教育目標で育てる資質・能力を授業につなぐことについても図示しておく。



そのためにも、資質・能力を育てる教育課程を教科等横断的な視点に立って編成し、カリキュラム・マネジメントによる指導と評価が大切になってくる。

② 教育課程を、教科等横断的な視点に立って編成し、資質・能力を育てる。

まず、学習指導要領の記述を掲げておく。

2 教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

- (1) 各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。)、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるように、□各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
- (2) 各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、□各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。 (総則第2教育課程の編成2を抜粋・下線は筆)

上述の「総則2の2」にある教科等横断的な視点に立った教育課程の編成は、文中□と□の2つあることが分かる。□が各教科等の特質を生かした教育課程で□が学校の特色を生かした教育課程の編成である。このことについて、□と□の順番を変えて次に述べる。

ア 各学校の特色を生かした、教科等横断的な視点に立つ教育課程の編成(上記□について)

学校教育目標が目指す資質・能力を育成するには、教育課程をデザインする2つの側面が必要である。その一つが全学年全学級が同じ目標をもって取り組むことによる全学年全学級共通で目指す資質・能力を育成する「学校の特色づくり」の活動をもつ教育課程である。すなわち、その学校の教育活動の「軸」になる教育課程である。そのことについて、学習指導要領には、次の記述がある。

1 各学校の教育目標と教育課程の編成

教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。⑦その際、第5章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。

1 目標

各学校においては、第1の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習の時間の目標を定める。

《第1の目標》

①探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(総則第2教育課程の編成より1を抜粋・下線は筆者)

(図ア)



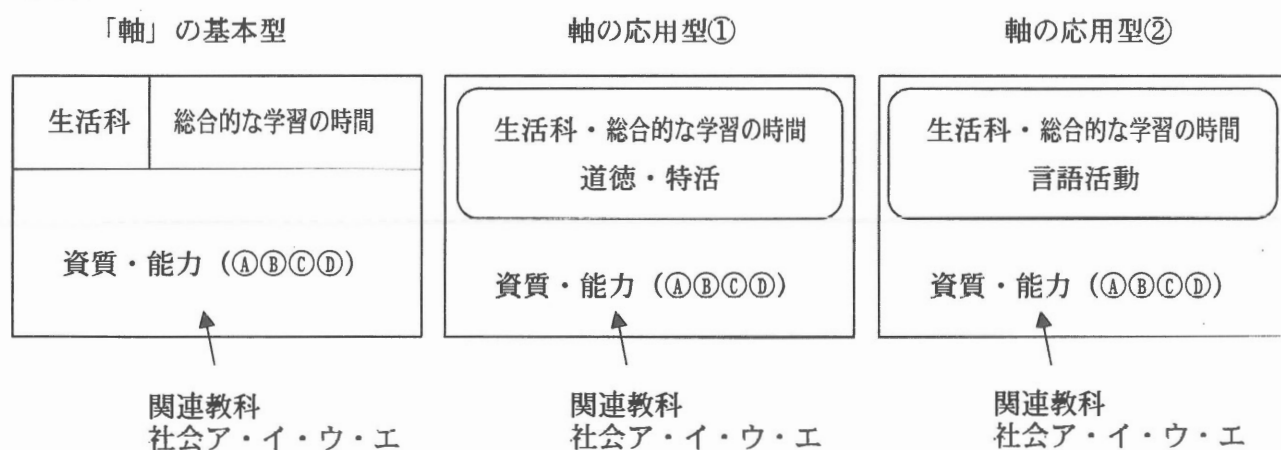
すなわち、教育課程の教育活動の「軸」になる教科等を上記学習指導要領による⑦総合的な学習に求めたい。上記①にあるように、総合的な学習は体験を通して探究的な見方・考え方を働かせ、教科等横断的・総合的な学習で、自己の生き方を考えることを目指している。

ただ、総合的な学習の時間は3～6年の学習で、教育課程の「軸」にするには、どうしても、1・2年生を合わせたい。そこで、総合的

な学習と同じような学習形態をもつ生活科と合わせたい。生活科が具体的な活動や体験を通して、探究的に活動し、人や社会や自然に働きかけ、自立を目指す教科であるからである。そして、その生活科が105時間のうち、70時間をあて、残りの35時間を教科として位置づける。こうして、学校の特色を生かした教育課程の「軸」を位置づけ、(図ア)に示すように学校教育目標で目指す資質・能力のすべてを対象にして完成する教科等横断的な視点に立つ教育課程を編成することができる。

その上、この「軸」(生活科と総合的な学習の時間)の学習・活動に当たって、当然関連する教科等が横断的に加わり、資質・能力の育成に厚みを加えるのである。そして、この「軸」は次の(図イ)にあるように、「軸」の基本型と考えることで、多様な学校の特色作りの応用型が考えられる。

(図イ)



軸の応用型①が、生活科・総合的な学習の軸に道徳(問題解決的学習のタイプ)、特活を入れた「軸」である。軸の応用型②は、生活・総合的な学習の時間の軸に学習活動を位置づけた「軸」やプログラミング活動(情報活動)を入れた「軸」などが考えられる。

また、この「軸」に、下記に示す学習指導要領にある「幼・保と小」の連携、「小・中」の連携・接続も位置づけることが求められている。

総則第2の4より抜粋

4 学校段階等間の接続

教育課程の編成に当たっては、次の事項に配慮しながら、学校段階等間の接続を図るものとする。

- (1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。
- (2) 中学校学習指導要領及び高等学校学習指導要領を踏まえ、中学校教育及びその後の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、義務教育学校、中学校連携型小学校及び中学校併設型小学校においては、義務教育9年間を見通した計画的かつ継続的な教育課程を編成すること。

イ 各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点に立つ教育課程の編成(上記ロについて)

学校教育目標が目指す資質・能力の育成には、教育課程をデザインする上記のロの上にロの側面がある。それが、各教科等の特質を生かした側面である。

各教科等の特質を生かした教育等横断的な視点に立つ教育課程の編成には、2通りある。1つは、各教科の特質をいくつかのまとまりに分けた各教科等の群としてとらえる方法と、2つには、各教科等をそれぞれ「個」としてとらえる方法である。この2通りの方法について次に述べる。

⑦ 各教科等を「群」として方法

各教科等の特質から、いくつかのまとまりをどんな観点で捉えるかが課題である。1つの観点は、学習指導要領にみる○の観点である。

総則第1の2より抜粋

2 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、次の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、児童に生きる力を育むことを目指すものとする。

- ① (1) 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。
- (2) 道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること。
- (3) 学校における体育・健康に関する指導を、児童の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより、健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること。

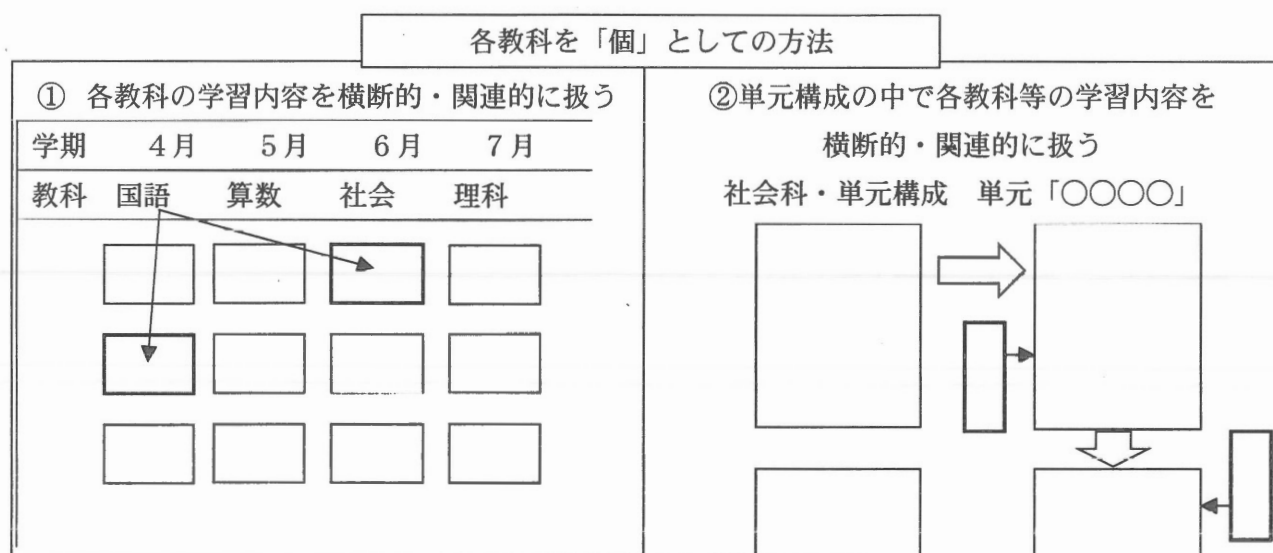
それは、上記文中にあるように特色ある教育活動を展開する中で、(1) ①、(2) ②、(3) ③の実現を図る。ここで見るように各教科の特質を①、②、③の群に分けてとらえることができる。すなわち、①が国語、算数、社会、生活、教科の群であり、②が音楽、図工、家庭、道徳、外国語、③が体育、保健、特活の群となる。また、この3つの群の分け方に加えて、④として、3つの群では十分でない、外国語、特別活動、総合的な学習の時間を別の群として構成する4つの群に分けることもできる。また、認知教科と非認知教科の2つの群に分ける考えもある。

各教科を3つの群にした学習			各教科を4つの群にした学習				各教科を2つの群にした学習	
①	②	③	①	②	③	④	①	②
知識・技能の基礎基本	豊かな心・体	健康安全 スポーツライフ	知識・技能 基礎・基本	豊かな心	健康安全	〇〇〇〇	認知教科	非認知教科
例 国・算 社・理 生	例 音・図 家・道 外・総	例 体・保 特活	例 国・社 算・理 生・家	例 音・図 家・道	例 体・保	例 外・特・総	例 国・算 社・理 生・外	例 図・家 体・保 総・特

① 各教科等を「個」としての方法

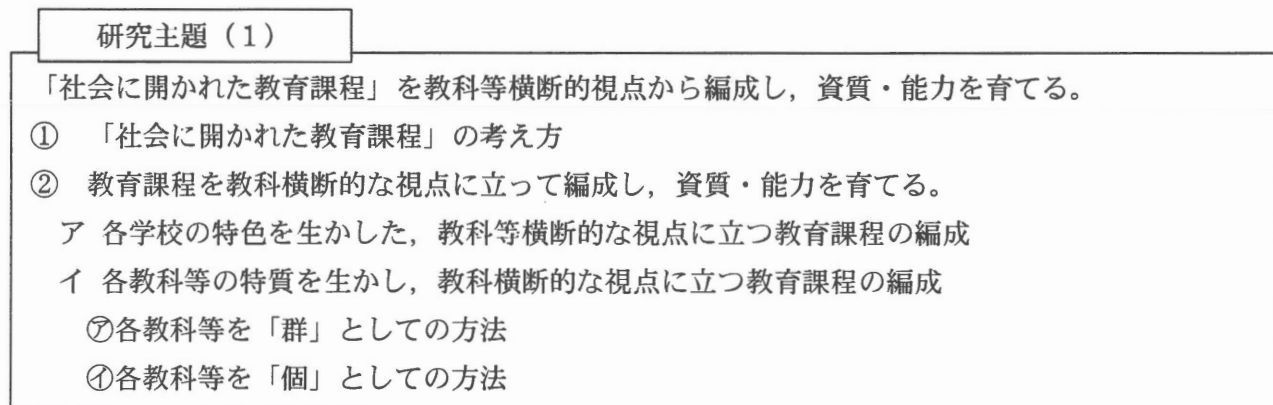
各教科等を教科横断的な視点に立って編成するには、2つの方法が考えられる。1つは、学期ごとぐらいで、下の図のように学習内容が関連する教科等を横断的につなぐ方法である。この表を用い図の学習計画を立てることができる。2つは各教科等の学習で学期ごとの単元構成の中で各教科等横断的に位置づける方法である。

どちらも目指す資質・能力は個々別々な学習内容で教科横断的な編成をしていることに課題が残る。特に、図中①の接合性、個の教科で目指す資質・能力が必ずしも学校教育目標が目指す資質・能力とつながりにくい面があることに留意しなければならない。



③ 研究主題（1）による社会科学学習は2つのタイプがある。

社会科学学習の2つのタイプについて、ここまで述べてきたことを整理して明らかにする。述べてきた項目を取り出して整理すると次の通りである。



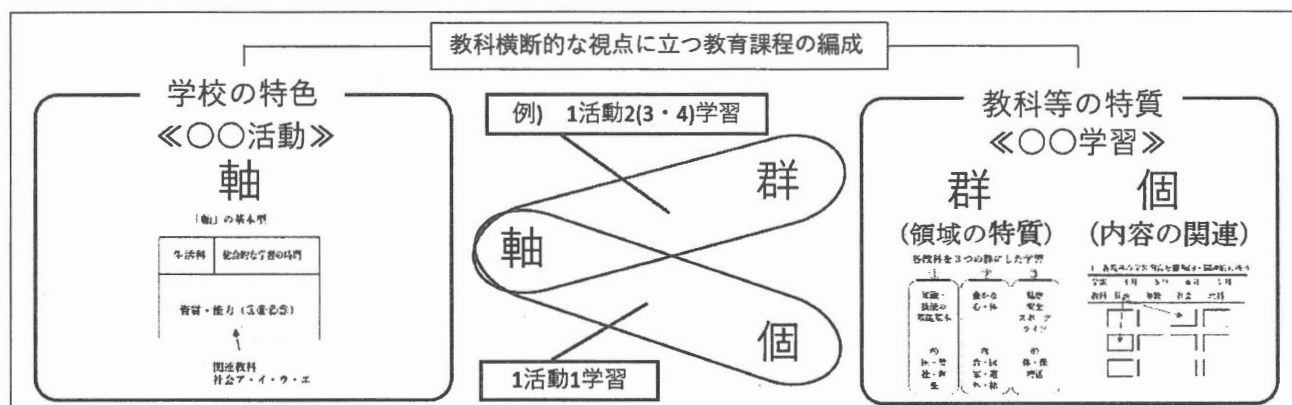
上記の①から、「社会に開かれた教育課程」は、学校教育目標が目指す資質・能力を明確にして改善され、授業（社会科）とつながり学校教育目標の資質・能力が育成されることを、家庭・地域・社会と共有する教育課程である。そして、この授業（社会科）は、2つのタイプの授業があり、1つは②のア・学校の特色を生かした教科等横断的な視点に立つ授業（社会科）であり、2つは②のイ・各教科等の特質を生かした教科等横断的な視点に立った⑦「群」または④「個」の扱いによる授業（社会科）である。

このように見てくると、「社会に開かれた教育課程」の編成は、学校教育目標が目指す資質・能力の育

成を、学校の特色を生かし学校教育目標が示す資質・能力のすべてを育成するいくつかの教科等（社会科）横断的な取り組みによる「〇〇活動」と、各教科等横断的な「群」または「個」の取り組みによって学校教育目標の目指すいくつかの資質・能力の育成を図る「〇〇学習」といえる2つのタイプの編成によることになる。その具体的な名称が、「軸」×「群」の「1活動3学習」であったり、「1活動4学習」であったり、「1活動2学習」であったり、「軸」×「個」の「1活動1学習」であったりする。

この2つのタイプの社会科授業の研究が今後の大きな課題と言える。

【教科横断的な視点に立つ2タイプの授業】



(2) 社会認識をひらく「幼稚園・保育所・生活科・社会科の『認識』のイメージ」と「指導計画」づくり

香社研は、その発足の時以来、「社会認識論」と「社会科学学習構造論」を研究し続けている。その中で、学習指導要領改訂に伴い、新たに香社研として構想したのが、P4の【図1】による「社会認識論」である。本年度から新学習指導要領の改訂をもとに「社会認識論」の研究を改善、発展させていくことにした。そこで、まず新学習指導要領の改訂のポイントを探しておく。

① 新学習指導要領の改訂のポイント

新学習指導要領は「社会に開かれた教育課程」の一端を担う社会科として、幼児教育や生活科などで育まれた資質・能力を3つの柱に沿って整理している。さらに、教科目標や各学年の目標を3つの柱によって改善を図り、社会的事象の見方・考え方、生き方を働かせて資質・能力の育成を目指している。そして、内容については、「地理的環境と人々の生活」「歴史と人々の生活」「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」の3つの枠組みにより整理しており、特に社会科のもつ特質から「現代的な諸課題」を踏まえた視点から充実するよう改善されている。

これらのポイントの中で、本県の「社会認識をひらく」【図1】の社会認識論で改善した内容は、次に示す4点である。

- ア 幼児教育や生活科で育てられた資質・能力について
- イ 社会科の教科目標や学年の「目標」「内容」について
- ウ 「社会に開かれた教育課程」における「社会科」について
- エ 「現代的な諸課題」について(P12参照)

アについて、今改訂に伴い、幼稚園・保育園・生活科・社会科の認識のイメージを系統的に示したことが特徴の一つである。子供の学びは学年で切り分けられることなく、連続的に発展していく。本改訂では、小学校、中学校、高等学校のつながりが強く意識されたものとなっている。香社研では、さらに、

幼児期からの認識のイメージをもち、研究を深めていくことで、幼稚園から高等学校に至る認識の系統を明らかにしていきたい。エについては、11 ページで詳細を説明する。

次に、イとウについて述べる。

② 「社会認識をひらく」【図1】を、社会科の教科目標や学年の「目標」「内容」から改善する

(ア) 今回の改訂で大きく改善されたことを、次に示す第3学年の学年「目標」と「内容」から述べる。

(第3学年)

1 目標

社会的事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- (1) 身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的な資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。
- (3) 社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。

2 内容

(1) 身近な地域や市区町村(以下第2章第2節において「市」という。)の様子について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

㊦ 次のような知識及び技能を身に付けること

(ア) 身近な地域や自分たちの市の様子を大まかに理解すること。

(イ) 観察・調査したり地図などの資料で調べたりして、白地図などにまとめること。

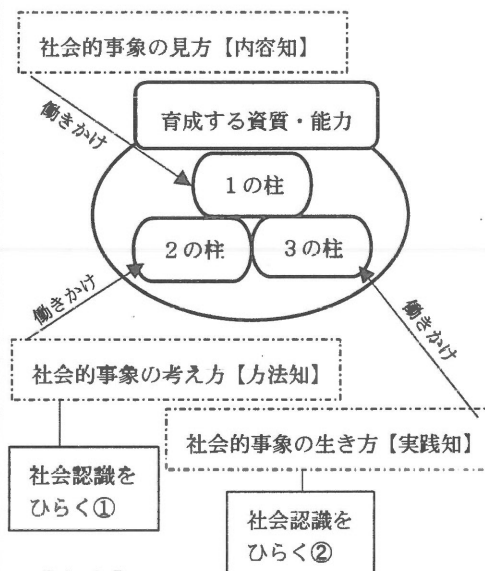
㊧ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 都道府県内における市の位置、市の地形や土地利用、交通の広がり、市役所など主な公共施設の場所と働き、古くから残る建造物の分布などに着目して、身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現すること。

【目標】

目標に「資質・能力」の育成を示す。

資質・能力の3つの柱



【内容】

社会的事象の見方・考え方
(社会的事象の見方)
(社会的事象の考え方)

目標にある資質・能力の3の柱については、【内容】としてではなく、「開かれた教育課程」として位置付く

目標は、3つの資質・能力の柱について記述されているのに対し、内容は2つの資質・能力に対応したものが表記されていることが分かる。すなわち、目標に示されている3つ目(学びに向かう力、人間性等『どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか』)は社会科の内容に位置づいていないということである。香社研は、長年の社会認識の研究において、内容を「内容知」「方法知」「実践知」と置き、現在の新指導要領が置く3つの資質・能力に対応する内容を構造化し、研究してきたプロセスがある。

ここで、「社会認識をひらく」について説明しておこう。

「社会認識をひらく」とは、従来どちらかというと「社会認識」は社会諸科学の見方による内容知であったことを「社会認識をひらく」として社会諸科学だけでなく、【図2】にあるように、自然諸科学、人文諸科学などの科学知・内容知とし、それを「社会認識をひらく①」とした。さらには、社会的に生きる力を発揮して社会に出るための知、あるいは人間としての生き方の「実践知」を入れた内容を「社会認識②」としてとらえたものであり、社会認識はこの「内容知」と「方法知」「実践知」によって構成する。

【図1】

幼稚園・保育園・生活科・社会科の「認識」のイメージ

～見方・考え方と生き方を働かせた資質・能力の育成～

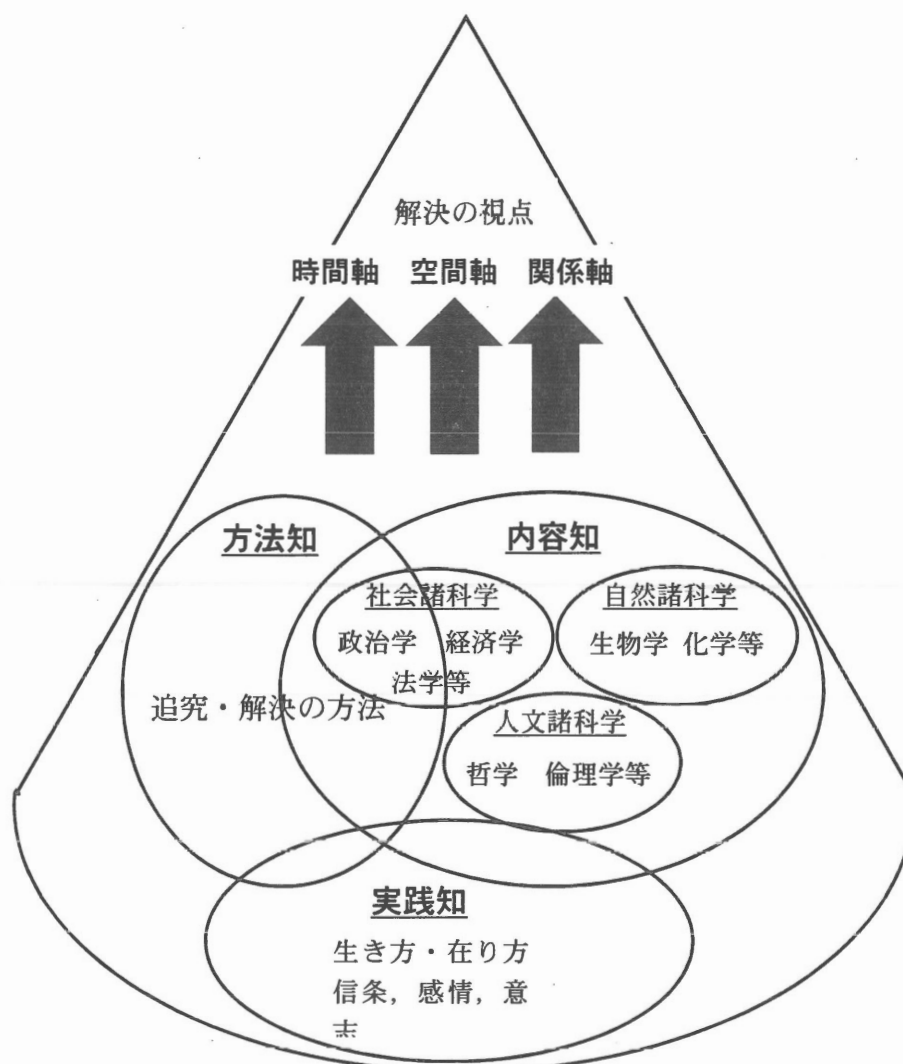
資質・能力	目 標	資質・能力の3本柱	視 点
◎ 幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせ、よさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通して育む 環境を通じて三つの資質・能力を一体的に育む	◎ 具体的な体験や活動を通して、身近な生活に関する見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成する。 生活科 生活科の特質に応じて育てられる見方や考え方 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、比較、分類、関連付け、試行、予備、工夫することなどを通して、自分自身や自分の生活について考えること	① 知識・技能の基礎 ◎ 生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何が分かったり、何ができるようになるのか ② 思考力・判断力・表現力の基礎 ◎ 生活の中で気付いたこと、できるようになったことを使って、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか ③ 学びに向かう力・人間性等 ◎ どのような心情、意欲、態度などを育み、よりよい生活を営むか。身近な人々や地域に関わり、集団や社会の一員として適切に行動しようとする態度	◎ 健康で安全な生活、身近な人々との接し方、地域への愛着、公共の意識とマナー、生産と消費、情報と交流 ① 自分と人や社会とのかかわり ◎ 身近な自然との触れ合い、時間と季節、遊びの工夫 ② 自分と自然とのかかわり ◎ 成長への喜び、基本的な生活習慣や生活技能 ③ 自分自身

目 標	資質・能力						
社会的な見方・考え方を働かせ、公民としての資質・能力の基礎を養う <table> <tr> <td data-bbox="331 208 438 1137"> 内容知 社会認識をひらく① </td><td data-bbox="438 208 906 1137"> 社会生活の理解、情報を調べてまとめる技能 ・地域や我が国の地理的環境における社会生活の理解 ・現代社会の仕組みや働きにみる社会生活の理解 ・地域や我が国の歴史を通しての社会生活の理解 ・社会的事象に関する情報を調べまとめる技能 世界の人々とともに生きることの大切さの自覚 ・主体的に調べ、課題を意欲的に解決しようとする態度 ・社会を考え、学んだことを社会生活に生かそうとする態度 ・地域社会に対する誇りと愛情 ・我が国の国土と歴史に対する愛情 ・地域社会の一員として世界の国々の人々とともに生きていく自覚 </td></tr> <tr> <td data-bbox="331 1137 438 1568"> 方法知 </td><td data-bbox="438 1137 906 1568"> 考える力、判断する力、表現する力 ・社会的事象の特色、相互の関連 ・意味を多角的に考える力 ・社会に見られる課題を把握し解決する力 ・社会への関わり方について選択・判断する力 ・調べたことや思考・判断したことを表現する力 </td></tr> <tr> <td data-bbox="331 1568 438 2051"> 実践知 社会認識をひらく② </td><td data-bbox="438 1568 906 2051"> 社会的に生きる力を発揮して、社会に出る ・学習した表現をもとに地域や社会に発信する ・学びの成果を地域や社会に役立てる方策を立てる ・地域や社会の活動に参加し協働する ・地域や社会の課題について学んだことを地域や社会との協働で参加・実践する </td></tr> </table>	内容知 社会認識をひらく①	社会生活の理解、情報を調べてまとめる技能 ・地域や我が国の地理的環境における社会生活の理解 ・現代社会の仕組みや働きにみる社会生活の理解 ・地域や我が国の歴史を通しての社会生活の理解 ・社会的事象に関する情報を調べまとめる技能 世界の人々とともに生きることの大切さの自覚 ・主体的に調べ、課題を意欲的に解決しようとする態度 ・社会を考え、学んだことを社会生活に生かそうとする態度 ・地域社会に対する誇りと愛情 ・我が国の国土と歴史に対する愛情 ・地域社会の一員として世界の国々の人々とともに生きていく自覚	方法知	考える力、判断する力、表現する力 ・社会的事象の特色、相互の関連 ・意味を多角的に考える力 ・社会に見られる課題を把握し解決する力 ・社会への関わり方について選択・判断する力 ・調べたことや思考・判断したことを表現する力	実践知 社会認識をひらく②	社会的に生きる力を発揮して、社会に出る ・学習した表現をもとに地域や社会に発信する ・学びの成果を地域や社会に役立てる方策を立てる ・地域や社会の活動に参加し協働する ・地域や社会の課題について学んだことを地域や社会との協働で参加・実践する	社会的な見方・考え方の働き 社会的な生き方の働き ① 知識や技能（何を知っているか、何ができるか） ○社会生活に関する理解（地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史、それらと人々の生活の関連） ○社会的事象について調べまとめる技能（社会的事象に関する情報を適切に集める、読み取る、まとめる技能） ② 思考力・判断力・表現力等（知っていること、できることをどう使うか） ○社会事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力 ○社会に見られる課題を把握し、社会への関わり方を選択・判断する力 ○思考・判断したことを適切に表現する力 ③ 学びに向かう力・人間性（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか） ○社会的事象について主体的に調べ分かうとして課題を意欲的に追究する態度（環境保全、自然災害防止、産業の発展、情報化の進展、先人の業績や文化遺産、我が国の政治の働き、世界の国々との関わりなど） ○よりよい社会を考え、学んだことを社会生活に生かそうとする態度 ○多角的な考察や理解を通して涵養される自覚や愛情など（地域社会の一員としての自覚、地域社会に対する誇りと愛情、我が国の国土に対する愛情、我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情、世界の国々の人々とともに生きていくことの大切さについての自覚など）
内容知 社会認識をひらく①	社会生活の理解、情報を調べてまとめる技能 ・地域や我が国の地理的環境における社会生活の理解 ・現代社会の仕組みや働きにみる社会生活の理解 ・地域や我が国の歴史を通しての社会生活の理解 ・社会的事象に関する情報を調べまとめる技能 世界の人々とともに生きることの大切さの自覚 ・主体的に調べ、課題を意欲的に解決しようとする態度 ・社会を考え、学んだことを社会生活に生かそうとする態度 ・地域社会に対する誇りと愛情 ・我が国の国土と歴史に対する愛情 ・地域社会の一員として世界の国々の人々とともに生きていく自覚						
方法知	考える力、判断する力、表現する力 ・社会的事象の特色、相互の関連 ・意味を多角的に考える力 ・社会に見られる課題を把握し解決する力 ・社会への関わり方について選択・判断する力 ・調べたことや思考・判断したことを表現する力						
実践知 社会認識をひらく②	社会的に生きる力を発揮して、社会に出る ・学習した表現をもとに地域や社会に発信する ・学びの成果を地域や社会に役立てる方策を立てる ・地域や社会の活動に参加し協働する ・地域や社会の課題について学んだことを地域や社会との協働で参加・実践する						

社会認識をひろく視点と内容			内容に含まれる要素
社会的な見方・考え方	視点1 社会生活の営みにおける課題の認識 ◎ 私たちは、人や物との関わりの中で、くらしを営み、願いをかなえる努力をすることに課題をもつこと。 ① 関係の諸機関が連携して人々の健康で安全な生活を支えている。 ② 人々の生活が変化し発展する中で、人々の協力や先人の働きがある。 ③ 私たちは地域とかかわり、誇りと愛情をもつことが大切である。	視点2 地理的環境に働きかける認識 ◎ 社会の地理的環境の変化に目を向け、広い視野に立って自分の考えをもつこと。 ① 社会の変化とともに、郷土や国土のよさを生かしながら、人々は生産や消費などで多くの課題に立ち向かって努力している。 ② 人々はよりよい社会を築くよう、環境・情報・福祉・防災などの課題に協力・連携して取り組んでいる。 ③ 持続可能な社会を目指す取り組みを進めることが大切である。 ④ 社会事象は相互に関連しており、日常の動きに目を向け、その事象のもつ意味を考えていくことが大切である。 ⑤ 地域・市や県には、それぞれ地理的環境に特色をもち、市役所・県庁や公共施設の働きによって発展している。 ⑥ 我が国の南北に長い領土において、自然環境の特色を生かして人・もの・ことの生活の場において、土地利用を工夫し、国土の保全に努めている。 ⑦ 食糧生産や工業生産に関わる人々の工夫や努力によって、優れた技術を生み、他機関との連携や他国との交流によって、産業の発展に努めている。	○位置や空間的広がり の要素 地理的位置、分布、地形、環境、気候、範囲、地域、構成、自然条件、社会条件、土地利用など
	① 関係の諸機関が連携して人々の健康で安全な生活を支えている。 ② 人々の生活が変化し発展する中で、人々の協力や先人の働きがある。 ③ 私たちは地域とかかわり、誇りと愛情をもつことが大切である。	視点3 我が国の歴史に愛情をもつ認識 ◎ 先人の働きに人間としての生き方や在り方を求めること。 ① 今の生活にもつながる先人の働きがあり、そこには人々の知恵や願いがある。 ② 郷土や国の発展に尽くした先人の業績や文化遺産を大切に、受け継ぐことが大切である。 ③ 我が国の時代の特色をもとに歴史や伝統・文化に誇りをもつことが大切である。 ④ 時代の移り変わりから、その時代のできごと・人物の働き・文化遺産を通して、その時代に生きた庶民のくらしの工夫・努力から生み出した文化を探り、自分の人間としての生き方を学ぶことができる。 ⑤ 我が国の歴史的な事業を探る中で、他地域や外国の当時の様子や考え方に視野を広げることができる。	○時期や時間の経過の要素 時代、起源、由来、背景、変化、発展、継承、維持、向上、計画、持続可能性など
	再構成の学習を組織し、主体的な学習を進める中で、「思考と表現」「指導と評価」の統一を図り、言語活動の充実を目指す。	視点4 現代社会の仕組みや働きを、社会の一員として自覚する認識 ◎ 地域社会、国際社会の一員としての自覚をもち、社会的事象のもつ意味を考えること。 ① 人々は、社会の出来事に共感したり感謝したり課題をもったりして社会を発展させようと努力している。 ② 公共的な事象に、自ら参画し、よりよい社会を形成しようとするのが大切である。 ③ 地域社会の一員として、より広い視野から考え、政治に参画することが大切である。 ④ 情報化の進展に伴い、日常生活の中で販売、運輸、観光、医療、福祉などの情報を生かすとともに、課題となること、規則を守ることに、自制・判断が大切である。 ⑤ 平和を願う日本人として、世界の人々と共に生きることの大切さを自覚する。 ⑥ 政治に関心をもつよう、日本国憲法、三権と国民生活の関係、地方公共団体の政治で政策の内容や計画から実施の過程、法令や予算に関心をもち、地域の開発・活性化にかかわろうとする。 ⑦ 国際社会における我が国の役割の現状から地域社会の一員としての自覚をもつ。	○事象や人々の相互関係の要素 工夫、努力、願い、業績、働き、つながり、関わり、仕組み、協力、連携、対策、役割、影響、多様性と共生など
	社会的な生き方	視点5 社会的に生きる力を発揮する認識 ◎ 地域に役立つ働きに参加・参画すること ① 社会的事象を学び表現したことを、地域や社会、外国に発信する実践活動 ② 社会的事象を学んだ認識をもとに、課題解決に参加・参画する実践活動 ③ グローバル化する世界の中で、日本が果たす国際協力、国際交流に積極的に取り組もうとする。	○公民として自覚する要素 社会参加、社会参画、国際協力、国際交流、PTA、自治会など

【図2】

資質・能力の育成



社会認識を、社会科学だけでなく、人文・自然科学など諸科学を内容として実践知を含む「社会認識をひらく①」とした。また、社会的に生きる力を発揮して社会に出るための知、あるいは人間としての生き方の「実践知」を入れた内容を「社会認識をひらく②」として、研究を進めてきた。

(イ) 新学習指導要領の3つの枠組みでとらえた「内容」から改善を図る

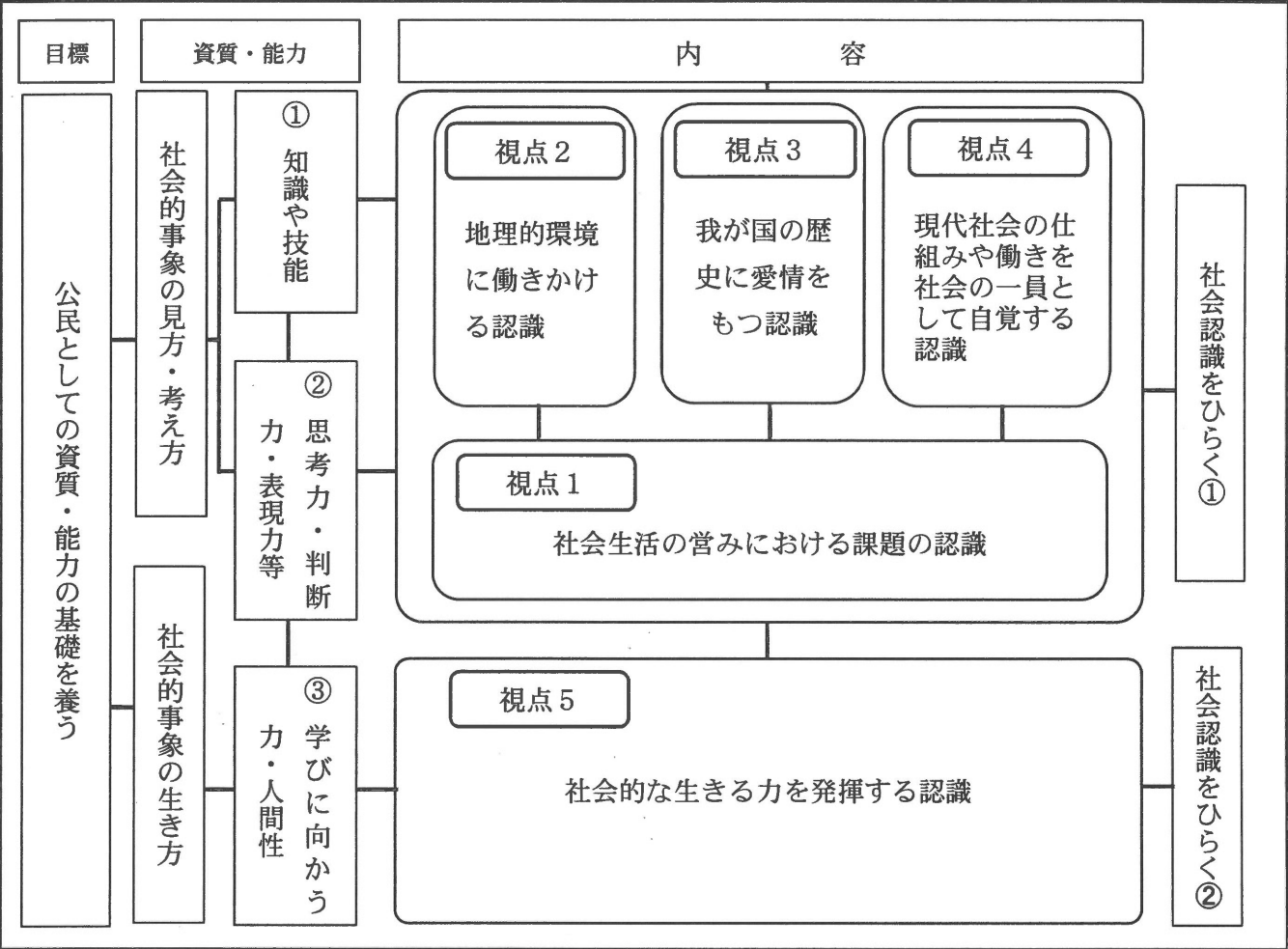
まず、各学年別に3つの枠「地理的環境と人々の生活」「歴史と人々の生活」「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」の「内容」を、学年を解体して3つの枠別に整理した。そうすることによって3つの枠の「内容」が小学校社会科において、どのように認識されるかを明らかにしたいと考えるからである。

ここで、香社研の独自性として、3つの枠組みである「内容」の前提として「視点1」を設定する。「地理」「歴史」「公民」の土台としてそれら3つの共通の土台となる「社会生活」の存在を重視したい。それは、子供が問題を解決するプロセスでは、常に社会的事象を自己の生活する社会生活と関連付ける必要があると考えるからである。

3つの枠組をもとにして社会科の全体像としての「認識」を次の【図3】としたときに、視点1の内

容が重要であることが分かる。

【図 3】



(ウ)「社会に開かれた教育課程」の視点から、「社会認識をひらく②」の内容の改善・補強を図る。

「社会的な生き方」は、よりよい社会を目指すことにある。私たちがよりよい社会を目指し、築いていくためには、社会生活の内容を基礎とした地理的な内容・歴史的な内容・公民的な内容の見方や考え方、表し方の学びを「持続可能な社会」の実現を目指した観点から、実社会の生活における社会的な自分たちの生き方を「社会参画」、すなわち社会の中で「働く」ことにつないでいくことによって達成し得るものである。そして、そのつなぎは、実社会で働くことの考えをもつことであったり、実社会に生かして働くことであったりする。

その「社会参画」につなぐ内容としては、社会生活の中で、地理的な内容としては地域の調査・観察の中で人・もの・こととのかかわりから、歴史的な内容としては人物・伝統や文化などのかかわりから、公民的な内容としては、災害、福祉、環境、エネルギー、平和のことなどから具体的なつながりがあげられよう。

ここに、社会科の認識論は社会に参画・実践論を加えることの重要性があると考えている。公民として資質・能力の基礎を養うためには、社会認識をひらく①の「内容」だけでなく、社会認識をひらく②の「社会的な生きる力を発揮する認識」が必要不可欠であることが分かる。

なお、社会参画への意欲や態度の育成にあたっては、次の3つの視点が大切である。

○ 社会的事象の確かな理解

よりよい社会を目指して取り組む人々を「参画するモデル」として取り上げる。実社会に生きる人々がどんな目的で、どんな願いをもって、どんな働きをしたのかなど、社会的事象の意味を理解することが大切である。

○ 思考力・判断力・表現力

社会は、様々な働きが相互に関係し合って、課題を解決してきている。そのため、多面的に考える、人ごとではなく「将来にわたって」自分の関わり方を考えるバランス感覚をもって判断する、意見交換ができるといった能力を育む必要がある。

○ 社会的な見方や考え方

社会的事象の意味をとらえる見方、考え方、表し方、生き方を養うことによって、自分の社会に対する働きかけの在り方について見つめ直し、自分の在り方について考えることができる。協働への糸口を見つけ、かかわろうとする。

授業の中で「あなたにできることは」と拙速に答えを求めるのではなく、事実をしっかりと確かめ、自分たちのできることの効果や実現性を吟味し合う学習が、社会参画への意欲や態度の形成につながっていくのである。

そこで、「社会参画」へつなぐ対策について述べる。

社会的な生き方を社会科学習で学び、それを「社会参画」につなぐことが、社会参画への意識の高まりとともに求められている。社会科学習では、これまで述べてきたように社会参画の活動そのものを含むものではないが、社会参画へのきっかけとなるよう「社会参画」につなぐことは重要なことである。ここでは、「社会参画」へつなぐ場となる対策を述べておく。

まず、「社会参画へつなぐ」きっかけとなる場の具体的な事例を2つ挙げておきたい。

- ・ 各地で伝わる祭りは、地域の寺社を核に住民の手によって受け継がれており、地域住民にとっては季節の大きな楽しみであり、地域の芸能・芸術・食などの文化が融合した、いわゆる地域文化の宝である。祭りへの参加は、自らの文化を守り、継承することへの参画がある。このような事例からは、「社会参画」につなぐ活動を生むきっかけが考えられる。
- ・ 近年、各地の道路沿いに「道の駅」が整備され、周辺の農家の人たちが、自分たちで育てた農産物を共同で置いている。そこには、地域の人、近隣の人、観光客等の人たちによるにぎわいがあり、参画する姿がある。このような事例についても「社会参画」につなぐきっかけとなる活動が存在する。

以上2つの事例を具体的に述べたが、このような事例以外にも次のような「きっかけ」となる事例が考えられる。今後の実践の中での取り組みが望まれるところである。

☐ 行政の機能へのきっかけとして

- 一人暮らしのお年寄りの世話
- 地域での子供の育成
- 河川、河川敷、道路、公園の清掃や除草

☐ 公共の機能へのきっかけとして

- 伝統文化の継承
- 古民家、町並みの保存
- ごみの収集
- 地産地消の推進
- 地域の特産品の発掘・調査・販売
- 住民の安心・安全
- 自然環境の保全

●地域の祭り・行事 など

③ 指導計画づくり

(ア) 指導計画とは

香社研では、平成 25 年度より、指導計画を重視している。授業を一単位時間で考えることなく、育みたい資質・能力、すなわち目的を明らかにし、その上で内容、教材を構造化していく。さらには、内容、教材をどのように学ぶのかの視点として、単元構成を重視し、一時間の授業と学校の教育目標がつながるような仕組みを整えている。

(イ) 指導計画の具体

i 資質・能力、内容・教材の構造

内容・教材 ・指導要領の内容 ・教科書分析	社会に参加する資質・能力とそれを支える力の想定	今までは、一単位時間や教材に重点を置く実践が散見されたが、香社研では引き続き、単元の本質に重点を置き、単元で養う資質・能力及び、単元の内容分析を十分に行った上で、教材研究を行う。
---	--------------------------------	--

ii 単元観・目標・評価規準

・「資質・能力、内容、教材の構造」を踏まえた目標、評価規準の設定 ・地域教材の活用を想定した単元観の構想 ・社会参画につなぐ授業案の立案	単元を通して、「何ができるようになるか」を明らかにし、単元の目標、すなわち「評価規準」を明記する。3つの資質・能力に準じて、評価規準は3観点で表す。
--	---

iii 単元構成

指導計画と評価計画の一体化 <table> <tr> <td> 問題をもち、見通しをもつ (主体性の重視) </td><td> 調べ・考え・表現し、まとめる (再構成の学習) </td></tr> <tr> <td> 目標 </td><td> つなぐ (発信、参加・参画) 社会参画へ つなぐ方策 </td></tr> </table>	問題をもち、見通しをもつ (主体性の重視)	調べ・考え・表現し、まとめる (再構成の学習)	目標	つなぐ (発信、参加・参画) 社会参画へ つなぐ方策	単元構成は、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」が一体となったものである。学びのプロセスに従って、資質・能力を養うための単元を構想する。 なお、その際、留意することとして、第1次で子供たちとしっかりと問題を共有し、具体的な見通しをもつことである。また、問題解決ができるように、単元を通して計画的に、知識・技能、見方・考え方を育てていくようにする必要がある。最後に、つなぐ段階では、現代的な課題に正対した有用性を感じられるようなゴールを設定したい。
問題をもち、見通しをもつ (主体性の重視)	調べ・考え・表現し、まとめる (再構成の学習)				
目標	つなぐ (発信、参加・参画) 社会参画へ つなぐ方策				

iv 学習の構造

小単元を中心的な学習として ・教材をつなぐ ・教材と思考操作－表現 ・汎用的なスキルの育成	育みたい資質・能力や内容と教材をつなぐ手続きがここで必要となる。教材をどう子供たちと出会わせ、どう操作させるか、小単元や本時を中心としてしかけを考える。
--	---

v 本時の学習指導

・思考と表現の一体化 ・指導と評価の一体化 ・評価基準の活用 ・評価観の転換	本時は、学習展開、子供の意識の流れ、指導と評価を大切にしたい計画を行いたい。子供の思考を促し、子供の思考が表出した表現を評価基準をもとに見て取り、指導に生かしていく。
---	--

vi 単元構想シート

・何ができるようになるか ・何を学ぶか ・どのように学ぶか ・何ができるようになっているか	4つの視点に沿って単元を計画する。単元を構想する際、4つの視点に沿うことで、本単元の本質や社会科の本質を考えることができる。また、授業者も参観者も単元プランが一目で分かるようになる。
--	--

(ウ) 単元構想シートについて

前述の研究の方針や指導計画をより具現化するものとして、一枚物の「単元構想シート」【図4】を開発した。単元を構想する際に、まず本単元の学びを通して、子供は「何ができるようになるか」を明らかにする。次に、資質・能力を養うためには、本単元における「何を学ぶか」を明らかにする。ここでは、社会認識の系統を重視し、断片的な知、関連的な知、総合的な知、さらには実践知までの構造を明らかにする。また、知が統合されていくために必要なプロセスとして、社会的事象を時間的、空間的、関係的に捉え、思考する見方・考え方も明記するようにする。

次にその内容を「どのように学ぶか」を明記する。新指導要領で示されている視点、主体的な学び、対話的な学び、深い学びにするための方法論を明記する。ただし、この方法論は一時間の授業のみの仕掛けではなく、単元を通した長期的な仕掛けであることに留意する。

最後に単元を通して「何ができるようになっていくか」という評価にあたる部分である。3観点の評価基準の見取りとして、学びに向かう主体的な態度は子供たちの学びの姿を見て取る。知識、技能については、ドメインで評価できるものは、テストなどで評価し、ドメインで評価しきれないものは、ノートの記事などで評価する。思考・判断・表現については、見取りが困難な観点である。そのため、香社研版評価基準を作成し、思考、判断、表現の質的転換点を明らかにした評価を行う。この評価も、一時間の見取りだけではなく、単元を通して学びのプロセスを形成的に評価していくものである。

このシートを単元構想時に作成することで、一時間の授業、すなわち「点」が、単元の学び「線」となり、さらには学校教育の中の社会科の学びとして「面」で捉えることができるようになる。それは、ひいては、教科の本質に向き合うことになり、なぜ社会科を学ぶのか、なぜこの単元を学ぶのかという自問が教師に生まれ、より、本質的な学びを実現できることになる。

【図4】単元構想シート

1 何ができるようになるか		
育みたい資質・能力、評価基準		
社会的事象についての知識・技能	社会的事象についての思考・判断・表現	社会的事象への主体的な態度
電気の確保に関わる対策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。	地域の人々の生活にとって必要な電気の確保から学習問題を見出し、問題を解決するために必要な社会的事象を時間的、空間的、関係的な見方で捉え、自他の考えや、資料等を比較、関連付け、総合して考えたことを言語などで適切に表現している。	地域の人々の生活にとって必要な電気の確保に関心をもち、それを意欲的に調べ、地域社会の一員としてよりよい生活環境を考えようとしている。
2 何を学ぶか		
実践知	・これから電気を使うときに私は ・私は、電気を支えている人がこんなに	【見方・考え方】 ①時間的
総合知	・電気は様々な人によって… ・24時間電気を使い続けるために	②空間的
関連知	・送電線は… ・水の仕組みと似ていて、電気が家まで送られるために	③関係的
断片知	・送電線 ・発電所（火力・水力等） ・電力会社の人	
3 どのように学ぶのか		
単元の問い		
第1次 第2次 第3次 第4次		
主体的な学びにするために	対話的な学びにするために	深い学びにするために
・個－全体－個となる学習展開	・ペアでの意見交流	・思考図を活用した整理 ・再構成された問い
4 何ができるようになっているか		
A	B	C
時間的、空間的、関係的な視点で事象を捉え、多様な事象を比較、関連付け、総合し、学びを通して問題解決を面で行っている。	時間的、空間的、関係的な視点で事象を捉え、具体的な事象同士を比較、関連付け、総合し、問題解決を線で行っている。	時間的、空間的、関係的な視点で事象を捉え、その事象を直接的に課題解決に生かそうとし、問題解決を点で行っている。

その単元でどのような資質・能力を育みたいかを構想する。3つの資質・能力と単元につながる具体的な目標も明記する。教材だけで授業を構想するのではなく、単元の内容と資質・能力をつなげることで、社会科の本質、単元の本質について、教師がじっくりと考えることができるようになる。

知の構造を整理する。ここでは、内容の本質を突き詰めるため、指導要領の分析、教科書分析、教材分析が欠かせない。単元を通して子供たちがどのように知を構造化していくのかを見通しながら計画をする。また、知を構造化するために必要な見方・考え方についても熟考する。

単元の問いと見通しを明記する。また、主体的、対話的、深い学びを実現するための単元を通した方法についても構想する。

評価基準を設定し、単元を通して質的転換点を意識した指導を行う。

(3) 現代的な課題による学習内容の工夫・改善

① 現代的な課題とは

これからの社会は予測困難な社会といわれる。大人でも問題解決が困難であり、問題の解が多様であり、未だに解が見つからない問題さえある。教科書に書かれていることは、一つの解決事例であり、それが、そのまま地域の課題、あるいは日本の課題を解決する正解ではないだろう。これからの子供たちは現代的な課題に立ち向かい、多様な価値観をもった人と協働し、その都度、最適解を見出していく力が求められる。その力を社会科で育むために、単元を構想する際、現代的な課題を取り上げる。例えば、農業単元の学習では、庄内平野のコメ作りを課題とするのではなく、日本が抱える農業の現代的な課題を取り上げる。現在ならば、「農業従事者の減少」「農業の魅力の減少」であろう。このような課題を設定することで、庄内平野の学習は目的ではなく、現代的な課題を解決するための手段となる。現代的な課題に対応する資質・能力を育成するために、単元を構想する際、その単元がはらむ現代的な課題に焦点を当てることにチャレンジしていく。教師は常に新聞やニュースに目を通し、日本、あるいは世界が抱える現代的な問題に敏感である必要がある。

② 現代的な課題例

現代的な課題について、いくつかの参考事項を次に示す。

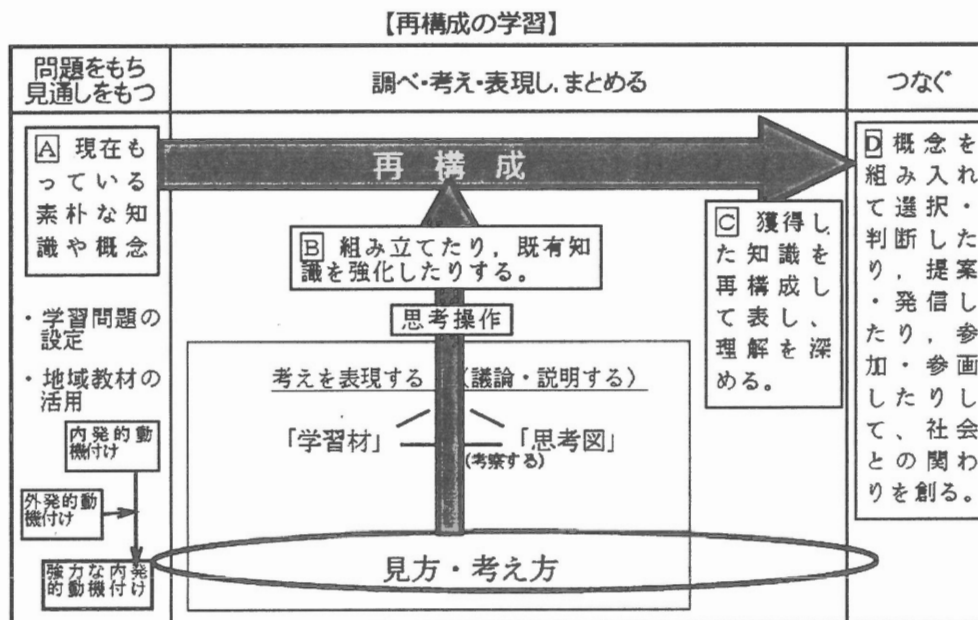
現代的な課題の視点(中教審答申より)	社会的事象
① 健康・安全・食に関すること	・環境問題
② 主権者として求められること	・自然災害
③ 新たな価値を生み出す豊かな創造的な活動のこと	・食糧問題
④ グローバル化の中で多様性を尊重すること	・エネルギー問題
⑤ 我が国の領土や歴史に関すること	・貧困
⑥ 伝統や文化を尊重すること	・人権
⑦ 多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦すること	・政治意識
⑧ 我が国の産業のもつ課題性とその創生に関すること	・情報問題
⑨ 自然環境や資源などの持続可能な社会づくりをすること	・経済問題
⑩ 豊かなスポーツライフを実現すること	・国際協力
	・地方創生
	・人口
	・少子高齢化

(4) カリキュラム・マネジメントの視点に立って学習方法の改善と学習評価の在り方を求める

① カリキュラム・マネジメントの視点に立った再構成の学習

香社研が平成20年度から主張してきた再構成の学習はどの教科にも必要な学習論であろう。総則には「様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと」とあり、その必要性が示されている。問題解決のために、学びのプロセスで見方・考え方が駆使され、ばらばらだった知識が構成され、また分解され、また統合されを繰り返し、具体が徐々に抽象になっていく。このような学びのプロセスを繰り返すことで学びに向かう人間性が高められ、思考力・判断力・表現力が洗練され、知識・技能が抽象化していくのである。今後は、このプロセスを思い描いた単元、年間計画を作成し、評価・運用していく必要がある。再構成の具体的プロセスを次の【図5】で示す。

【図5】

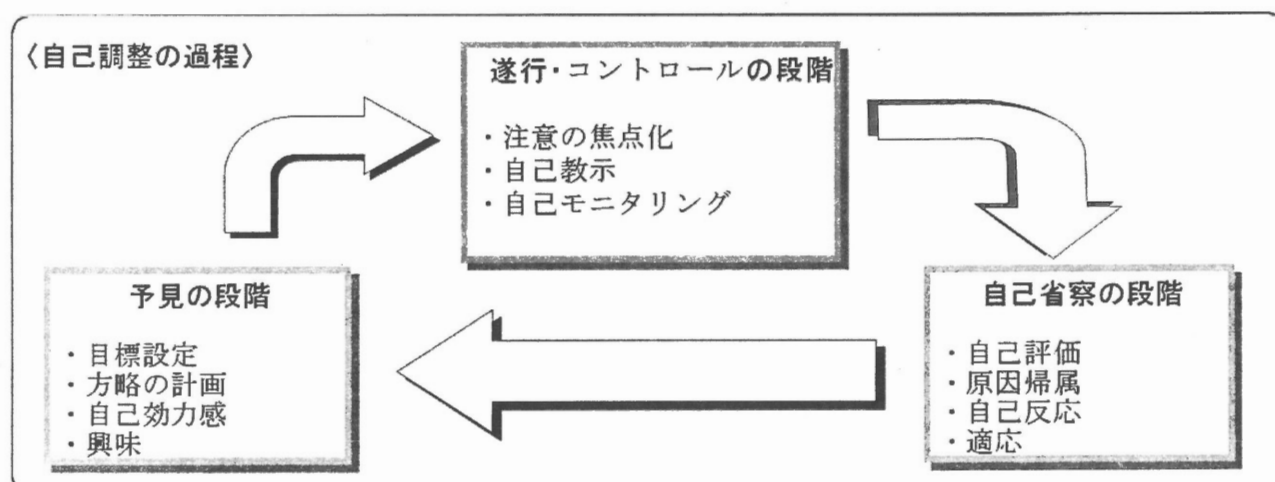


③ カリキュラム・マネジメントの視点に立った自己調整の過程

自己調整の過程は目標到達を目指し、思考や感情、方略、行動を自らが引き起こし、自己の内面を組織的、計画的に機能させていくことを指している。自己調整は、下図のとおり、「予見の段階」「遂行・コントロールの段階」「自己省察の段階」の3段階の循環的プロセスにより行われる。大まかに言えば、「予見」は学習問題を設定し、見通しをもって計画を立てる段階、「遂行・コントロール」は、思考と表現を繰り返し、再構成しながら自己をコントロールする段階、「自己省察」は、社会との関わり方を選択・判断したり、総括的な評価を入れた自己評価をしたりする段階と言える。この3つのサイクルが自己調整の過程であり、このサイクルを通して自己調整力を育てていく【図6】。

これからの時代に求められる子供の力に鑑みるとき、学習者自身が自己の問題解決をメタ認知しながら学び続けるプロセスが必要になる。すなわち、自己の学びのプロセスを自己で調整しながら進める学習である。例えば「今は問題解決の8合目だぞ」「今は問題解決までに必要な〇〇の知識をもっている」「問題解決まであと、〇〇に関する知識が必要だ」「そのために、〇〇さんに会って調査をする必要がある」など、自己の学びをメタ認知する力が求められる。同時に、各教科、領域など、カリキュラム全体を通して自己調整の学習を組み込んでいくことが求められる。

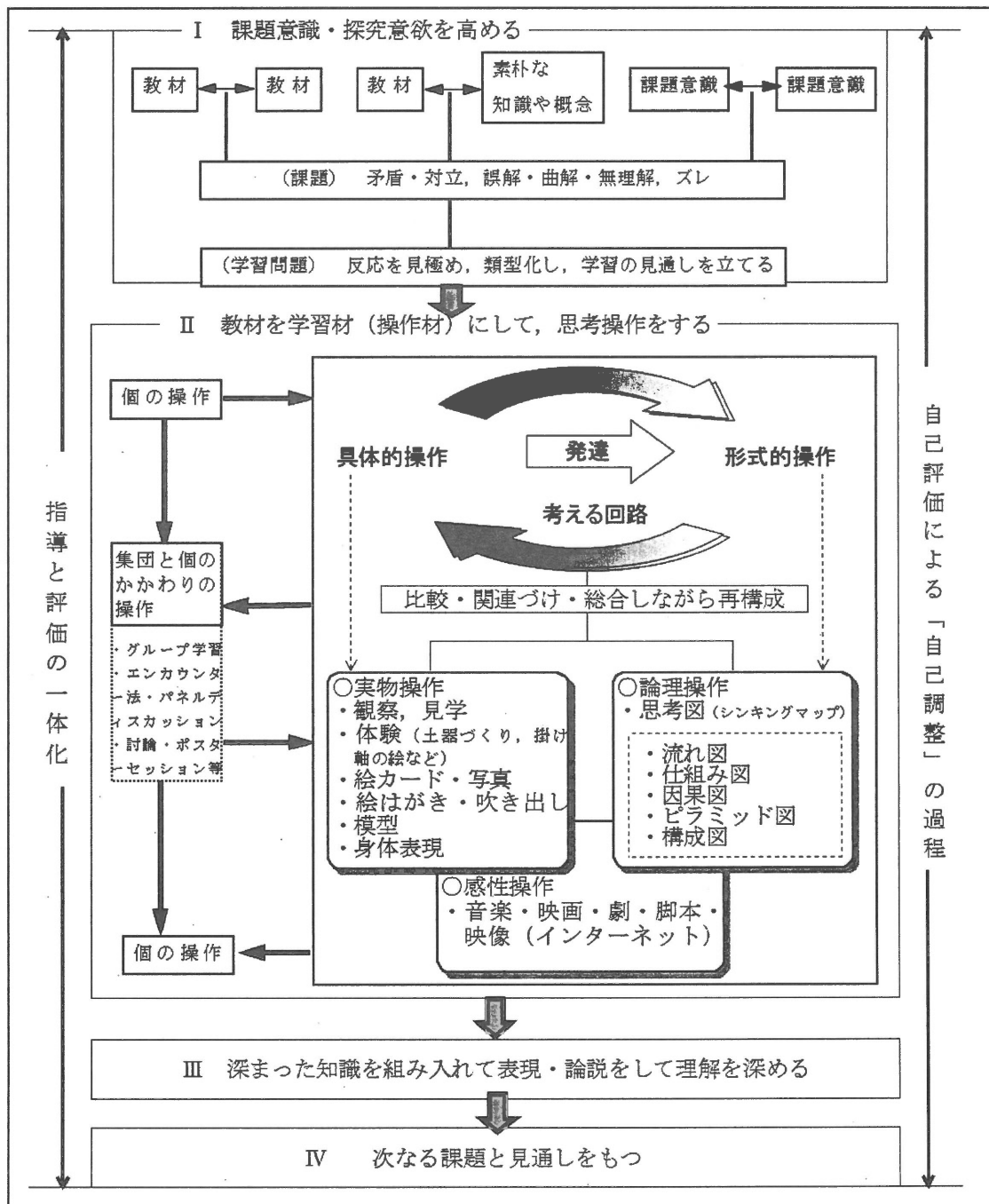
【図6】



③ 子供の思考の過程

思考の質的な発達を促すためには、活動がある点でせき止められるような状況に立たせることが必要である。このせき止められる状況は、社会的事象の矛盾や対立の場面であり、課題や学習問題の設定などの学習活動に生かしていくことで、学習に意欲的に取り組むようになり、飛躍的な発展にもつながってくる。

【図 7】



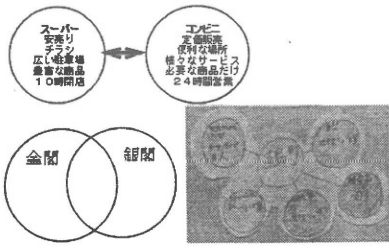
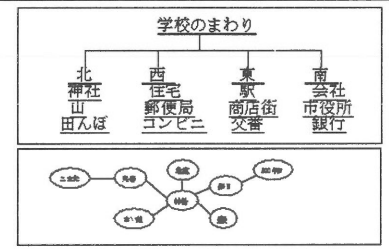
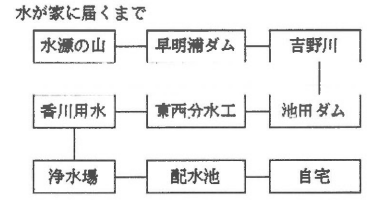
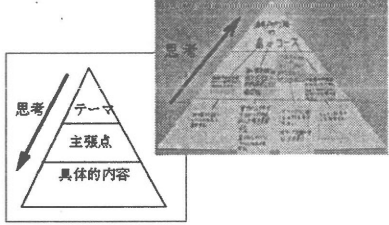
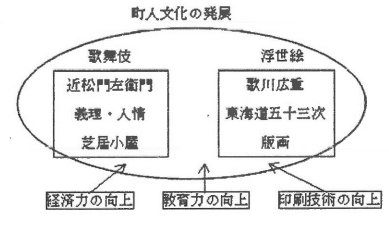
そこで、学習材の開発に合わせて、「思考の構造」(子供が思考する道筋)【図 7】を明らかにすることにより、一昨年度取り組んできた。その中心としたのが、「思考図」(シンキングマップ)の活用である。このことによって、「思考と表現」の一体化による言語活動の充実を図りたい。

④ 思考操作

主体的、対話的、深い学びを実現するために、思考操作は有効な手立てである。香社研は発足当時からこの思考操作を重視した学びを展開してきた【図8】。思考操作は思考力・判断力・表現力を可視化するものである。授業中、子供たちの討論が空中戦になる光景をよく目にする。あるいは、話す内容はきちんともっているのに、話し合いに参加できない子供を見かけることもある。いずれも、今何について話合っているか、何が問題になっているかという共通理解が図られていないことに依拠する。香社研が提案する思考操作は、社会科で必要とされる比較・分類、総合、関連付けを促すツールである。

思考図の系統として、「拡散を促す思考図」「収束を促す思考図」がある。どの思考図も具体と抽象

【図8】

	名称	思考の様相	例
①	サークルマップ 丸	分析する 比較する 仲間分けをする 自分の考えをふくらませる	
②	ツリーマップ 線	考えを整理する 自分の考えをふくらませる 発想を広げる	
③	フローマップ 四角	順序性を明らかにする 原因と結果をつなぐ	
④	ピラミッドマップ 三角	自分の考えを積み上げていく 考えを概念化する 主張点を具体で述べる	
⑤	コンストラクションマップ 丸、四角、線等の構成・組み合わせ	いくつかの考えを構造化し、整理する	

を行き来することができることが特徴である。思考図を操作しながら、具体に迫りたいときは「例えば」、抽象に迫りたいときは「つまり」などの言葉を使い、子供の思考を活性化させたい。単元全体の中で、今どのような思考をさせたいのかを明らかにした上で効果的な思考図を選択したい。これらの思考図は中学年の段階から子供が問題解決のプロセスで慣れ親しみ、その有用性を感じておく体験や経験が必要である。高学年や中学校では、子供たち自らが問題解決のために必要な思考図を活用する姿を求めたい。

これらの思考図は、子供たちの見取りにくい思考を可視化することで、教師自身も授業改善の視点で評価を行える良さがある。

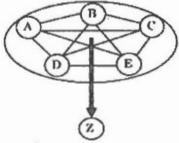
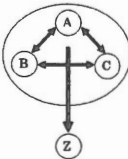
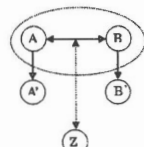
⑤ カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れた評価

「何ができるようになるか」という目的を明確にし、計画 (PLAN) したならば、それを実行 (DO) しながら、常に評価 (CHECK) し、次の指導 (ACTION) につなげる必要がある。香社研では、単元を通した目的を評価基準に表し、そのカッティングポイントを評価基準として設定した。評価基準も評価規準同様、一時間だけの評価ではなく、単元を通して汎用的に使えるものを提案している。尚、資質・能力の知識・技能については、テストやノート記述等で行い、主体的な態度は日々の学びに向かう子供の姿勢から評価する。目に見えにくい思考・判断・表現についての評価基準を設定し、学習評価の日常化を図る。

【図9】

社会的事象についての知識・技能	社会的事象についての思考・判断・表現	社会的事象への主体的な態度
電気の確保に関わる対策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。	地域の人々の生活にとって必要な電気の確保から学習問題を見出し、問題を解決するために必要な社会的事象を時間的、空間的、関係的な見方で捉え、自他の考えや、資料等を比較、関連付け、総合して考えたことを言語などで適切に表現している。	地域の人々の生活にとって必要な電気の確保に関心を持ち、それを意欲的に調べ、地域社会の一員としてよりよい生活環境を考えようとしている。

↓

単元の課題	私たちの生活に欠かせない電気はどこからやってきて、どのように送られているのだろう。また、これから私たちはどのように電気を利用していけばよいか考えよう。		
評価規準	問題を解決するために必要な社会的事象を時間的、空間的、関係的な見方で捉え、自他の考えや、資料等を比較、関連付け、総合して考えたことを言語などで適切に表現している。		
評価基準	A	B	C
	時間的、空間的、関係的な視点で事象を捉え、多様な事象を比較、関連付け、総合し、学びを通して問題解決を面で行っている。 	時間的、空間的、関係的な視点で事象を捉え、具体的事象同士を比較、関連付け、総合し、問題解決を線で行っている。 	時間的、空間的、関係的な視点で事象を集め、その事象を直接的に課題解決に生かそうとし、問題解決を点で行っている。 
子供の姿	電気が届くまでに、多くの人が様々な地域で、計画的、協力的に仕事をしている。このまま使い続けるといつかはなくなってしまうので、今までの発電方法を踏まえて、持続可能な電気供給の在り方を考えたり、自分ができる節電の方法を考えたりする必要がある。	電気が届くまでに、多くの人が協力して工夫して仕事をしている。このまま使い続けるとなくなってしまうので、新たな方法を考えたり、自分が節電をしたりする必要がある。	電気が届くには・・・ ・多くの人が関わる ・工夫がされている ・計画的に行われている。 このままではなくなるので ・新しい方法を生み出す ・自分が節電をする (単発での記述)

4 29年度の香社研としての実践課題

- ・「社会に開かれた教育課程」の編成に基づく、社会科学習の実践
- ・「主体的・対話的で深い学び」による授業改善
- ・「学習評価」をカリキュラム・マネジメントの視点に立っての研究開発

〈参考・引用文献〉

- 天笠茂, 2011. 学力を創るカリキュラム経営 ぎょうせい
- 安藤寿康・鹿毛雅治編, 2013. 教育心理学—教育の科学的解明をめざして— 慶應義塾大学出版会
- バリー J ジーマン・ディル H シャンク・塚野州一, 2006. 自己調整学習の理論 北大路書房
- Chip Wood 著 安彦忠彦・無藤隆訳, 2008. 成長のものさし 図書文化社
- 藤村宣之著, 2012. 数学的・科学的リテラシーの心理学, (pp55-66) 有斐閣
- G ウィギンズ/J マクタイ著 西岡加名恵訳, 2012. 理解をもたらすカリキュラム設計 日本標準
- 波多野誼余夫, 2001. 適応の熟達化の理論を目指して, (pp45-47) 教育心理学年報 40
- 今井むつみ, 2016. 学びとは何か 岩波新書
- 石井英真, 2015. 今求められる学力と学びとは 日本標準ブックレット, (pp39-46) 日本標準
- 鹿毛雅治, 2007. 子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」教育出版
- 神野直彦著, 2010. 「分かち合い」の経済学 岩波新書
- 海保博之, 1997. 「温かい認知」の心理学 金子書房
- 香川県小学校道德教育研究会, 1975. 個を育てる道德授業 明治図書
- 香川大学教育学部附属高松小学校, 1969. 思考操作の学習 明治図書
- 香川大学教育学部附属高松小学校, 2013. パフォーマンス評価で授業改革 学事出版
- 香川大学教育学部附属高松小学校, 2017. 創る 東洋館出版社
- 香川県小学校社会科教育研究会, 1993. 新学力観に立つ社会科学習一問いと論証の調べ学習一 明治図書
- 香川県小学校社会科教育研究会, 2002. 基礎・基本の定着と発展の学習 東洋館出版社
- 香川県小学校社会科教育研究会, 2008. 「社会科ノート」による思考力の育成 東洋館出版社
- 香川県小学校社会科教育研究会, 2017. 香川大会 要項 美巧社
- 香川県小学校社会科教育研究会, 2017. 社会科の魅力を創る～新しい学習指導要領を見据えて～ 美巧社
- 梶浦真, 2015. アクティブ・ラーニングの基礎知識 小学校・中学校編 1 教育報道出版社
- 観音寺市立観音寺小学校, 2017. 香川大会 研究紀要 美巧社
- 美馬のゆり・山内祐平, 2005. 「未来の学び」をデザインする 東京大学出版会
- 三宅なほみ, 2013. 教育心理学特論, (pp187-204) 放送大学教育振興会
- 無藤隆, 1997. 協同するからだことば～幼児の相互交渉の質的分析～ 金子書房
- 無藤隆, 2007. 現場と学問のふれあうところ 新曜社
- 文部科学省, 2008. 小学校学習指導要領解説総則編, 道德編, 特別活動編, 総合的な学習の時間編 東洋館出版
- 文部科学省, 2014. 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会-論点整理
- 文部科学省, 2017. 新学習指導要領(平成29年3月公示)
- 奈須正裕・諸富祥彦, 2011. 答えなき時代を生き抜く子どもの育成 図書文化
- 奈須正裕, 2017. 「資質・能力」と学びのメカニズム 東洋館出版社
- 西林克彦, 1994. 間違いだらけの学習論 なぜ勉強が身につかないか 新曜社
- 根津朋実, 2006. カリキュラム評価の方法—ゴールフリー評価論の応用— 多賀出版
- 大浦容子, 2002. 日本認知科学会(編) 認知科学事典, (pp386) 共立出版
- 岡田涼訳, 2009. 自己調整学習と動機づけ 北大路書房
- 岡田涼・中谷素之・伊藤崇達・塚野州一編著, 2016. 自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術 北大路書房
- 佐伯胖, 2007. 共感・育ち合う保育のなかで— ミネルヴァ書房
- 佐々木裕子, 2014. 21世紀を生き抜く3+1のカ ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 佐藤公治, 2002. 社会的構成主義 日本認知科学会(編) 認知科学事典, (p397) 共立出版
- 澤井陽介, 2016. 子供の思考をアクティブにする社会科の授業展開 東洋館出版社
- 澤井陽介, 2017. 授業の見方 「主体的・対話的で深い学び」の授業改善 東洋館出版
- 柴田義松, 2006. ヴィゴツキー入門 子どもの未来社
- 高橋史朗, 1998. 臨床教育学と感性教育 玉川大学出版部
- 高松市小学校社会科研究会, 2017. 社会的な見方・考え方・生き方を育てる授業づくり～アクティブラーニングによる「授業の日常化」を目指して～ マットプリント
- 高松市立十河小学校, 2017. 香川大会 研究紀要 美巧社
- 田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤村宣之, 2012. 新しい時代の教育方法 有斐閣
- 滝沢武久監修 香川大学教育学部附属高松小学校著, 1985. 思考操作の学習 明治図書
- 中央教育審議会教育課程企画特別部会, 2015. 論点整理 資料1 資料2
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会, 2016. 審議のまとめ(素案)
- 山森光陽, 2010. 授業デザインの最前線Ⅱ, (pp184-197) 北大路書房
- 吉本均, 1987. 現代授業研究事典, (pp194-195) 明治図書

本年度総括 さ・東社研

報告者 東かがわ市立白鳥小学校 原井和彦

1 研究主題

思考力の育成を目指した学習プランの開発
～社会科の魅力を体感し、学びを深める授業のあり方～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

本部会は、これまで、地域素材を発掘し典型材と比較・分析をしながら子どもの興味、関心を喚起する地域教材開発を行ってきた。また、追究の意識が途切れず、思考が連続するような学習指導の在り方を研究してきたところである。しかし、昨今、教師の世代間のバランスが変化中、「社会科では何を教えればよいのか」とか「どのように学ばせたらよいのか」等の基礎的な課題にぶつかっている若年教員も見られるようになってきている。そこで今年度はサブテーマとして、「社会科の魅力を体感し、学びを深める授業のあり方」を設定し、ベテラン教員の授業技術の伝承を図るとともに、新しい時代の社会科教育の進め方について研究を進めてきた。

(2) 研究活動

日時	活動	内容
6月14日	事前授業検討会	討議「主体的に調べ学習を行わせる単元構成の工夫」
6月22日	第1回研究会	研究授業「水はどこから」第4学年
7月24日	夏季研修会事前研修	発表内容の検討、プレゼンテーションの打ち合わせ
11月28日	第2回研究会	講演「新しい時代に向けた社会科教育」

3 研究実践について

(1) 第1回研究会 6月22日 会場 東かがわ市立白鳥小学校

- ① 研究授業 4年 単元名「水はどこから」
- ② 授業者 東かがわ市立白鳥小学校 教諭 沖 肅二
- ③ 授業概要

本単元は、浄水場の見学を通して、水道事業が私たちの暮らしにどのように役立っているかを考える学習内容である。また、本時の授業は単元終末の学習活動であり、児童がこれまでに獲得した具体的な知識を、どのように抽象的な知識にまとめ上げていくかが見どころ。

④ 研究討議のまとめ

- ア 調べて考えさせるためには、まずは児童の中に「調べたくてたまらない」という状況を作り出すことが大事であるが、本実践にはそのための単元構成の工夫が組み込まれていた。
- イ 具体的な知識から、抽象的な知識に高めるためには、何段階かの思考作業が必要であるが、本時の実践では、児童の思考を可視化しながら情報の再構築を主体的に進めさせていた。



(2) 第2回研究会 11月28日 会場 さぬき市立さぬき南小学校

- ① 演題 「新しい時代に向けた社会科教育と学級経営の在り方を探る」
- ② 講師 高松市総合教育センター指導主事 河田祥司 氏
- ③ 講話概要 (受講メモをもとに内容を再構成しているので一部表現が変わっていることをご容赦ください。)

第1 研究をはじめるに当たって大切なこと (研究員相互の共通理解を図ること。)

- ワーク1 30年後の未来社会を描きながら、これからの子供に必要な資質・能力とは何かを部員で意見交流する。
- ワーク2 新学習指導要領の第1章「総説」1の(1)を講師のリードで読み込む。
以下、学校教育に求められる資質・能力。
 - ・ 多様な変化に積極的に向きあうこと
 - ・ 他者と協働して課題を解決していくこと
 - ・ 知識を概念的に理解し、情報を再構成し、新たな価値につなぐこと
 - ・ 複雑な状況変化の中で目的を再構築することができること

第2 学びの過程を大切にする ～「AさせたいならBと言え」理論をもとに～

- 仮説1 「主体的・対話的な学び」をさせたいなら→「教師の説明や指示」を減らせ
パターン化／練習と応用／見通し／我慢／子供が使える掲示物など
- 仮説2 「深い学び」をさせたいなら→「思考を再構成する状況」を作れ
何のための作業かを明確に／対話で再構成／問い返し／振り返りなど
- 仮説3 「モチベーション」はすべての基本
内発的動機づけ／ポジティブな結果予期／協力的雰囲気づくりなど

第3 教員こそ多様な変化に積極的に向き合うべき～「イレギュラーを楽しむ学級経営」～
子供がやりたいことのルール化／社会貢献／交渉する体験／学級通信で味方の増員
／子供の願いを形に／他者から肯定的に評価される場づくり など

4 本年度の成果

- ベテラン教員の様々な経験や知見を継承していく研究の仕組みができたこと
- 他者の授業から学ぶ際に、単元構成の工夫や、授業改善の本質を見抜く目が養われたこと
- 思考の再構築を図るための思考操作の方法について議論できたこと。
- これからの時代に必要な資質・能力について部員の共通認識が図れたこと。
- 学びに向かう力を育てるためには、学級経営力の向上が必要であると共通理解したこと。
- 有志による研究会(「大社研」)が立ち上げられたこと。
- 支部独自開催の現地研修会が実施できたこと。

5 本年度の課題(来年度の方向性)

- R:本部会の社会科教育の成果と課題に関する各種データを分析し、実態をリサーチすること。
- P:これからの子供にとって必要な資質・能力を共通理解し、研究主題や仮説を立てること。
- D:ベテラン教員と若年教員の効果的な研究交流を図り、社会科の授業の見方を学ぶこと。
- C:県や全国の研究会(全社研埼玉大会)に研究のまとめを発信し評価を受けること。
- A:研究方向を改善するとともに、さらに研究実践を積み上げること。

本年度総括 小豆社研

報告者 土庄町立土庄小学校 平林泰徳

1 研究主題

社会認識を深め、社会に関わる力を育てる学習

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

社会認識を深め、社会に関わる力を育てるためには、社会に対するものの見方、考え方を身に付けることが不可欠である。そのために学習過程において、問題解決的な学習を設定しなければならない。その展開の筋道として考えられるのは、

- ① 社会事象に関して事実認識を明確にすること
- ② 事実と事実を関連付けて理解させること
- ③ 社会事象の意味や働きを考えさせること
- ④ 学んだ意識をもとに自分の意思や価値判断を明らかにすること である。

このように、段階を踏むことによって、子どもの意識と思考の流れに沿った学習展開が可能になり、社会認識を育てていく素地が培われていくと考える。さらに、子どもの内面に現れた驚きや戸惑い、葛藤から発生した問題意識をもとに、効果的な資料の提示や調査、インタビューなどの体験的活動、自分で調べたことや考えたことを話し合い、発表する場を設定することによって、追究意識が継続され、社会認識が育ち、社会と関わる力が育っていくと考えられる。

社会認識を深めることについては、地域社会や我が国の社会生活、社会変化とその対応、我が国の歴史や伝統・文化、社会の一員としての参画といった各単元の社会事象について、観点に沿った情報収集や思考操作による整理などが行え、自分なりの言葉で正しく解釈できる力を伸ばしたい。そのために、どのような手だてが有効か探りたい。そして、社会に関わる力としての、地域や我が国に対する誇りや愛情、よりよい社会を持続するために自ら取り組もうとする態度や能力を、どのように育てればよいかを探るようにしたい。

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
平成29年 4月27日(木)	事業計画	組織づくり・研究テーマ・年間計画立案
5月31日(水)	第1回授業研究	第5学年「わたしたちの国土」～国土の気候の特色～ 授業者 土庄町立土庄小学校 上嶋 光晴
7月26日(水)	香小研夏季研修会	第5学年「地域をつないで見える日本の水産業」 提案者 土庄町立土庄小学校 上嶋 光晴
9月23日(土)	香社研定例会	第4学年「わたしたちの県の広がり」 提案者 土庄町立土庄小学校 上嶋 光晴
9月29日(金)	第2回授業研究	第5学年「日本の米づくりを考えよう」 授業者 小豆島町立苗羽小学校 大下亜紀子

3 研究実践について

(1) 本年度実践授業の単元構成

①「わたしたちの国土」～国土の気候の特色～

次	学習課題	主な学習活動
1	北海道、山形、小豆島、沖縄4つの地域の3月の様子を見比べて、学習問題をつくろう。 (1時間)	日本列島は、南北に細長くそのため、北は寒く、南は暖かいという特色があることをとらえる。また、同じ季節であっても、雪や氷で覆われた冬のような気候の地域もあれば、桜の花が咲く地域もあれば、海水浴ができるような夏のような地域があることに気付く。
2	梅雨と台風、季節風を調べよう。 (2時間)	梅雨、台風、季節風は我が国の気候を特色づけている現象であり、人々の暮らしに大きな影響を及ぼしていることを理解する
3	日本各地の気候の特色についてまとめよう。 (2時間)	気候区分図から、北海道・日本海側・中央高地・太平洋側・瀬戸内海・南西諸島の各気候の特色をまとめ、雨温図から、太平洋側と日本海側、太平洋側と瀬戸内海の降水量の違いや、北海道の気候を降水量の視点で他と比較したりする。

4	気候の特色をまとめ、ミニ論文を書こう。 (2時間)	低い土地、高い土地、山地、暖かい土地、寒い土地、雪国における人々の工夫や知恵を概観し、学習問題に関して学んだこと、考えたことをまとめる。
---	------------------------------	--

②「日本の米づくりを考えよう」

次	学習課題	主な学習活動
1	日本の農業の様子を調べて、学習問題をつくり、学習計画を立てよう。 (3時間)	身の回りにある農作物や教科書の農作物の分布の資料などを活用して、日本の農業について概観し、主要作物である米づくりについて詳しく調べる課題と学習の見通しを立てる。
2	山形県庄内平野の米作りに関する取組や食糧生産についての課題を調べよう。 (6時間)	庄内平野の米づくりについて調べ、安心・安全でおいしい米づくりを目指した農家の取組、品質管理や運輸システムの整備、我が国の食料生産に関する課題についてまとめる。
3	農家の方の思いや願いから、農業の未来についてまとめ、自分の提言をまとめよう。(3時間)	三角図を用いて小豆島の米づくりを中心に農家の方の米づくりに対する思いを整理し直す。未来の農業について、自分の考えをミニ論文に書く。
4	学んだ内容をまとめ、家庭、地域に発信しよう。(1時間)	一人一人が、日本の米づくりと向き合い、自分のこととして考えた『農業いきいきプラン』をポスターに仕上げ、家庭、地域へ発信する。

(2) 社会認識を深め、社会に関わる力を育てる方策

①「わたしたちの国土」～国土の気候の特色～

日本各地の特徴的な気候を有する地域の雨温図を提示し、気候の違いを明らかにするとともに、気候の違いがなぜ生じるのかという追究課題を設定する。日本の国土の特徴や気候の特色をとらえるために、資料集を作成・配布し、グループ活動を通して収集した情報を再構成しながら思考を深め、クラス全体で交流する表現活動につなげる。学習した国土の特徴や気候の特色、自然条件と向き合ってきた人々の歴史や文化、産業の進行など様々な視点をつなぎ、持続可能な社会をめざした先人の工夫や知恵を学んでいく中で未来志向をベースとしてミニ論文にまとめる。

②「日本の米づくりを考えよう」

学習問題を設定する段階で、米づくりの工夫や努力の概要とともに改善すべき課題があることにも気付かせ、国内農業の現在と未来について調べる意欲化を図る。国内の代表的な米作地の資料から、米の生産を主とする農業が日本国民の食糧確保に重要な役割を果たしていることや我が国の農業と自然環境との深い関わり、農業に従事する人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働きなどを調べる。その後、小豆島の米づくりについて収集した情報をまとめる。小豆島と日本の農業の未来に関するアピールポイントと改善策を、グループ活動や学級全体でのカード操作を通して考える。一人一人が今後の自分たちと日本の米づくりとの関わりを考えて、「農業いきいきプラン」としてポスターにまとめて発信する。



【カード操作による思考の再構築】

4 本年度の成果

グループ発表やカード操作で思考を再構築し発表する活動により、比較や類別といった社会事象の認識を深めるための力を育てることができた。

国内と地元地域に共通する米づくりの課題と展望をまとめる中で、商品価値を高めるための関係者の努力に迫ることができたとともに、今後の活性化を図る上の観点を、児童が自身のこととしてもつことができた。

主体的・対話的で深い学びにつながる学習展開に迫ることができた。

5 本年度の課題(来年度の方角性)

新学習指導要領における改訂内容を踏まえ、現代的な課題に対応できる資質や能力を育てるためには、どのようにするか。

本年度総括 高松社研

報告者 高松市立屋島小学校 真鍋 長嗣

1 研究主題

社会的な見方・考え方、生き方を育てる授業づくり
～問題解決的実践学習で授業の日常化を目指す～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

平成29年3月に公示された新学習指導要領では、目標において「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な資質・能力の基礎を育成することを目指す」と示された。「社会的な見方・考え方」については、小学校では、「社会的事象の見方・考え方」と示され、内容面では、社会に見られる課題について対応していくべき内容が新たに盛り込まれている。香社研でも新たに「現代的課題に対応する資質・能力の育成」が提言されるとともに、全国大会での成果を今後の研究に取り入れていくことが示された。

また、昨年度の全国大会に向けて、ここ数年間において高松社研では「問題解決的実践学習」論を展開しながら研究を進めてきた。それらの成果を踏まえながら、これから求められる新たな研究を進めていくことができるように、本年度の研究主題を「社会的な見方・考え方、生き方を育てる授業づくり ～問題解決的実践学習で授業の日常化を目指す～」と設定した。

具体の授業づくりにおいては、教師主導の学習から、子どもの主体性を大切にした学習に転換するために、子どもの既有的知識や経験とつないで単元を貫く学習問題を設定すること、深い問題解決につながる思考操作の場や深まった課題を設定すること、学んだことを発信することで社会参画の素地を養うことなどについて、子どもや地域の実態に応じた研究を進めた。

なお、本年度の主な研究内容は、以下の通りである。

【主な研究内容】

- 1 主体的・対話的で深い学びの実現を目指す「問題解決的実践学習」についての研究
 - (1) 「問題をもち見通しをもつ」段階の研究
 - (2) 「調べ、考え、表現し、まとめる」段階の研究
 - (3) 「つなぐ」段階の研究
- 2 資質・能力の育成を目指した指導計画についての研究
 - (1) 単元観 (2) 資質・能力、内容・教材の構造（新学習指導要領を見据えた内容研究も）
 - (3) 目標と評価規準 (4) 単元構成 (5) 学習の構造 (6) 本時の学習指導 (7) 板書計画
- 3 カリキュラム・マネジメントとしての「学習評価」「授業評価演習」の研究
 - (1) 板書 (2) 自己評価（ノート） (3) 学習評価 (4) 授業評価演習

(2) 研究活動

期日	活動	内容
4月20日（木）	教科主任研修会	本年度の運営、研究、各種事業の計画等
6月8日（木）	市定例研修会①（教科研）	各ブロックで授業研究、研究討議 北（太田小・亀阜小）南（前田小・多肥小）
6月10日（土）	香社研定例研修会	実践提案（十河小にて授業公開）
7月24日（月）	夏季研修会（市）	夏季研修会に向けて分科会発表内容検討
7月26日（水）	夏季研修会（県）	分科会Ⅰ提案（太田小・亀阜小・前田小・多肥小実践）
9月28日（木）	市定例研修会②（教科研）	各ブロックで授業研究、研究討議 北（新番丁小）南（鶴尾小）
2月17日（土）	高松社研 研究委員会	本年度の総括・フォーラム発表内容検討等
2月24日（土）	香社研フォーラム	提案発表（新番丁小・鶴尾小）

3 研究実践について

第1回定例研修会（教科研）	平成29年 6月 8日（木）
香社研定例研修会（十河小授業公開）	平成29年 6月10日（土）
第2回定例研修会（教科研）	平成29年 9月28日（木）

	授業者	単元名	実践の概要
第一回 教科研	北ブロック 高松市立 太田小学校 中筋 修	5年 「わたしたちの生活と 食料生産」	「農家数の減少」という日本の農業が抱える課題に着目し、香川県や高松市で行われている事例から学び、農業振興の方策を考えていく学習を展開していった。
	高松市立 亀阜小学校 小松 裕貴	3年 「市の様子」	まちの魅力を再発見することを目指して、自然、文化、交通など様々な観点から調べるとともに、地域に住む人々の思いや願いを探ることで学習を深めていった。
	南ブロック 高松市立 前田小学校 吉井 孝一	4年 「自然災害から くらしを守る」	聞き取り調査や資料からの情報をもとに絵カードを作り、時系列により紙芝居に表現する活動を通して、抽象的な取り組みを具体的なイメージに置き換えていった。
	高松市立 多肥小学校 吉岡 光平	6年 「武士の世の中へ」	鎌倉幕府が行った政治の学習だけでなく、武士や庶民の暮らし、そして生み出されていった文化を探るために御家人に焦点を当て、鎌倉時代の特色を理解していった。
香社研 定例研	高松市立 十河小学校 藤澤 大地	4年 「自然災害から くらしを守る」	学習指導要領の改訂に伴い、第4学年の内容に独立して移行された「自然災害から人々を守る活動」に焦点を当て、地域の過去の台風被害とその後の防災対策について学習していく様子を、香社研定例研において授業公開することで提案した。
第二回 教科研	北ブロック 高松市立 新番小学校 池田 沙也香	4年 「ごみのしよりと 利用」	ごみ処理にかかわる市や県の取り組みを3つの視点（減量・資源化・環境）からとらえるとともに、地域の課題「海ごみ」を教材化することで、主体的な学習を展開していった。
	南ブロック 高松市立 鶴尾小学校 日下 浩子	6年 「明治の国づくりと 人々の生活」	当時の生活・文化や新しい時代を切り開こうとする人々の熱をつかむために「坂本龍馬」を中心に単元化し、江戸から明治への急激な発展の背景を理解していった。

4 本年度の成果

- (1) 夏季研修会に向けて、高松社研の部員が一丸となり、研究・運営に携わった。提案の手法も高松社研独自の「授業評価演習」を取り入れることで、研究の内容だけでなく、討議方法についても県下に発信することができた。【夏季研修会】
- (2) 香社研定例研修会において、十河小の協力により土曜日の授業公開を行った。新学習指導要領に基づいた研究を子どもの姿で提案することができた。【定例研修会における授業公開】

5 本年度の課題（来年度の方向性）

これまでの研究成果および全国大会の成果を来年度にも生かしつつ、新学習指導要領の内容を見据えた授業づくりと内容研究を行うとともに、若年教員への研究の継承も行っていきたい。

1 研究主題

主体的にかかわりながら追究する社会科学習の創造

— 対話の活性化を図る単元構想の工夫 —

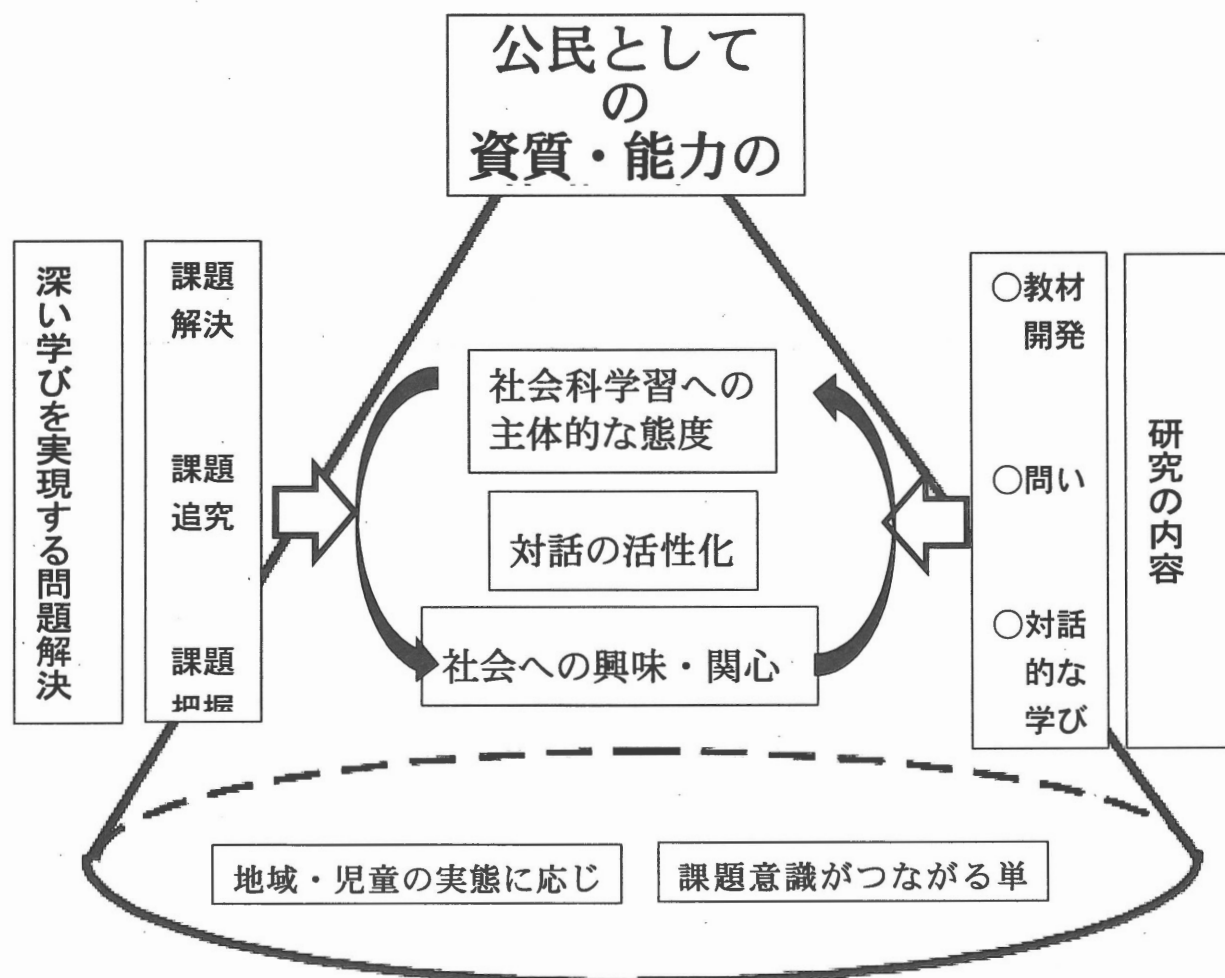
2 本年度の研究の概要

(1) 研究主題について

子どもを取り巻く社会は、情報化やグローバル化などが人間の予測を超えて加速度的に進展しており、急激な変化を続けている。そうした変化は複雑で予測困難となっており、すべての子どもたちの生き方に大きく影響するといえる。このような時代だからこそ、子どもたち一人一人が変化に受け身的になるのではなく、主体的に向き合い、他者とも協働して社会や人生をより豊かなものにしていくことのできる資質・能力を育むことが必要とされている。

小学校社会科の目標は、「公民としての資質・能力の基礎を育成すること」である。公民としての資質・能力とは、個人として社会に適応し、自分とのかかわりで問題を発見したり、解決したりすることのできる力である。さらに、社会の人々とも力を合わせ、様々な問題を解決し、よりよい未来を考えたり、創っていかうとしたりすることのできる力を育てていく必要がある。

以上のことから、社会的事象に主体的に向き合い、子ども同士で、また、実社会の人々ともかかわり合いながら協働的に追究していく子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

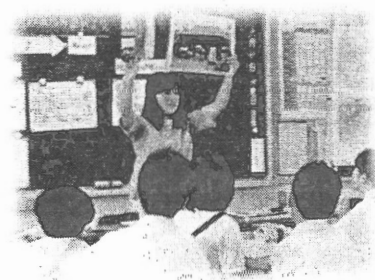


(2) 研究活動

日時	活動	内容
3月 下旬	事前勉強会	来年度の研究について
4月19日	坂綾小研総会	組織編成について
5月19日	坂綾小研事前検討会	第6学年「天皇中心の国づくり」指導案検討
6月 7日	坂綾小研研究授業①	第6学年「天皇中心の国づくり」授業実践
6月15日	夏季研修会事前勉強会	夏季研修会役割分担について
7月26日	夏季研修会実践発表	第6学年「天皇中心の国づくり」実践提案
9月29日	坂綾小研事前検討会	第5学年「工場に携わる人々の思いに迫る」指導案検討
10月19日	坂綾小研研究授業②	第5学年「工場に携わる人々の思いに迫る」授業実践
11月17日	定例研修会事前勉強会	第3学年「工場の仕事」提案資料検討
12月 9日	定例研修会	第3学年「工場の仕事」実践提案

3 研究実践について

研究授業①では、中央史の学習後、発展として地方史を取り上げた。学習課題を「讃岐でも天皇中心の国づくりが進められたと言えるか調べよう」とし、国分寺グループ、役所グループ、そして税グループの3つに分かれて調べ活動を行った。全体で話し合う活動も取り入れ、多角的に捉えられるようにした。子どもたちは、資料から府中町に国府が置かれていたことや讃岐国分寺が中央の国分寺と同じ建て方であること、絹や米等が税として府中から中央に送られていたことを見付け発表し合った。讃岐で天皇中心の国づくりが進められただけでなく、自分たちが住む府中町がまさに讃岐の中心であることに気付き、驚くと共に改めて歴史学習を身近に感じたようであった。



〈授業風景①〉

研究授業②では、自動車関連工場に焦点を当てた実践を行った。自動車関連工場のBCPという新しい課題を取り上げ、学習課題を「なぜ岡山の工場が、BCPの相手を遠い新潟の工場にしたのだろう」とし、災害や事故等の緊急時と互いの工場がもつ高い技術力の2つの面から予想し、印刷資料だけでなく、地図や映像といった多様な資料を基にして検証を行った。児童は話し合い活動を通して、関連工場同士が横のつながりを作ることは、災害時に部品の生産を止めないですむだけでなく、技術交流を通して、技術力の向上を図ることのできる環境を作ることにもつながり、自動車工業を大きく支える取り組みになっていることに気付くことができた。



〈授業風景②〉

4 本年度の成果

資料の少ない地方史を取り上げたり、組み立て工場ではなく関連工場に焦点を当てたりと、どちらの実践も、新しい課題に挑戦した、高い志と深い教材研究に基づく実践であった。また、子どもの疑問を引き出し「知りたい」、「調べたい」という追究意欲を高める単元展開の工夫がなされ、どの子どもも意欲的に学習に取り組み、社会事象への理解を深めることができた。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

今後も、必然性の高い問いをもとにした単元構想を工夫していく必要がある。子どもが問いをもつには、教材の質や教材との出会わせ方が大きく影響する。子どもたちが、自分なりの疑問をもち、予想をしたり、調べたり、話し合ったりすることを通して、課題を解決することを楽しさや喜びを感じられる単元を構築していきたい。また、教師や児童が、課題の追究の中で学びの振り返りを大切にすることで、社会科の深い学びを実現できるように研究を重ねたい。

本年度総括 丸亀社研

報告者 丸亀市立郡家小学校 櫻井 道芳

1 研究主題

自立と共生を育む社会科学習

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

「自立」とは、自己形成すなわち自分づくりであり、自分の目標を明確にもち、それに向かって自ら意思決定しながら学習を進めることである。「学習」を個と集団の学び合いとするなら、まず個が課題を追究し、更に協働し、共感的に問題解決をしていくことが重要である。学習活動を通じて自立する力を育むためには、意思決定の場を効果的に取り入れることにより、自分のこととして課題をもつことができる。また、十分に社会的事象に対する理解を深め、自ら意思決定をすることで、自己の問題を再構成する状況が生まれる。さらに意思決定することにより、自分で決定した満足感、新しい知識による再認識に対する充足感を子どもたちは感じることができると考えている。これからの学習指導では、こうした学習経験を重ねることで、子どもたちに自己有用感を育てていくことが必要であると考えます。「共生」とは、個と集団の学び合いの中で新しい価値を見付け、社会参画への意欲をもったり、みんなと協力して行動したりすることである。言い換えると、社会や他の人から必要とされていることを感じながら、力を合わせて共に生きていこうとする意思や態度を培うことをめざしていきたいと考えている。

(2) 研究活動

日 時	会 場	研 究 内 容
4月11日	城西小	研究組織づくり，研究主題決定，年間計画作成，夏季研勉強会
5月31日	飯北小	丸小研研究授業 6年「武士の世の中へ」 授業者 丸亀市立飯山北小学校 教諭 岡田 直哉 指導者 香川大学教育学部附属高松小学校 轟 秀明 先生
6月30日	城東小	夏期研修会のための事前勉強会
7月8日	岡田コミュニティセンター	定例研修会 3年「はたらく人とわたしたちの暮らし」 提案者 丸亀市立城西小学校 教諭 池田 和樹 指導者 高松市総合教育センター 河田 祥司 先生
7月26日	高松テルサ	夏期研修会 6年「武士の世の中へ」 提案者 丸亀市立飯山北小学校 教諭 岡田 直哉
11月29日	城坤小	丸小研研究授業 5年「わたしたちの生活と工業生産」 授業者 丸亀市立城坤小学校 教諭 藤井 隆法 指導者 丸亀市立飯山北小学校 教頭 福家 光洋
12月 1月	城東小	フォーラムカップに向けての勉強会 次年度に向けての勉強会

3 研究実践について

(1) 研究授業 6年 「武士の世の中へ」

本実践では、武士の暮らし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いといった事象について資料から読み取ったり、当時の人々の思いを考えたりすることを通して、土地を介した武士の主従関係や武家政権の仕組みにせまった。

①対話的な学習にするために

元との戦いの様子を資料から読み取る活動では、見方を焦点化させるために、3つの視点「武器」「戦い方」「やる気」を提示した。児童は、自分が興味をもった視点に関連する資料を中心に選び、個人で資料を読み取りノートにまとめた。その後、自分が読み取った内容をグループの友達に説明

した。そうすることで、自分の気付かなかった情報を友達から得られ、大切な情報の共有化が図られた。

また、課題を班で協力して解決するために、自分の持っている情報を分かりやすく相手に伝えること、情報をしっかりと受け取り自分なりに解釈してノートにまとめること、お互いに共有した情報から分かったことや考えたことについて話し合うことが必要となり、話し合い活動が活発に行われた。

②深い学びに導くための思考ツールの活用

本時では、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた理由を考えた。その際、資料から多くの情報を読み取っているが、それらの情報がどう関連して、課題解決に結びつくのかが考えられず、戸惑っている児童が多く見られた。そこで、全体交流では、グループで出た意見を教師がYチャートに分類し、そのまともりに見出しを付けることにした。各視点に分類して整理することで、学習問題解決につながるキーワードが共有でき、手がかりを基に深く考えることができた。

さらに、元との戦いの場面でも、武士が元の大軍に立ち向かった理由について元寇襲来の資料から読み取ったことを、観点ごとに分け、分類したことを総合してまとめていった。このことから、元との戦いは非常に困難であったことに気づき、そのような戦いに駆けつけた武士達の思いや願いにせまることができた。



(2) 研究授業 5年 「わたしたちの生活と工業生産」

本実践では、日本の自動車産業について、生産の特徴や問題点、これからの車づくりの在り方などを考えていく活動を通して、工業についての認識を深め、自分たちが考えた未来の車を提案していく活動を行った。

特に本時では、日本の自動車工業について学習してきたことをもとに、これからの自動車開発について求められる観点を見つけていった。活動の中で、子どもたちは自分が思い描く自動車の特徴を付箋に書き、友達との交流の中で、「安心・安全」・「環境」・「乗り心地」・「ユニバーサルデザイン」・「見た目」などの観点でまとめていった。さらに、終末部で最近の車づくりの資料を提示することで、自分たちが考えてきたことと、日本の車づくりの方向性とは大きく異なっていないこと、日本の技術力が想像を超えているところまできていることを読み取らせ、そして、これからの車に必要な観点について再度自ら意思決定させることで、次時以降、根拠をもって車づくりを提案していく活動ができるようにした。

4 本年度の成果

昨年度までの全国大会の成果を踏まえたうえで、今年度は目の前の子どもたちに目を向けた実践ができた。特に成果として挙げられるのは以下の2点である。1つ目は、児童の学習意欲が継続するための課題設定や振り返りの場の設け方である。主体的に学ぶために、どの実践も課題を自分事として捉え、授業の終末部には次時に向けての新たな問いや疑問が生まれ、活動意識が高まったといえる。2つ目は、対話的な学びの充実である。丸社研では、小型ホワイトボードを用いた学び合いを進めてきたが、本年はそこに思考ツールを加えて活動を行った。そうすることで、自他共の考えが可視化でき、学び合いの楽しさを感じられたのではないかと考えている。

5 次年度の課題（来年度の方角性）

対話的な学習を進めるうえで、子どもたち同士は活発に活動できている。しかし、その活動がなぜ必要か、なぜこの思考ツールが有効なのか、児童が自らが動き、理解してこそ真の対話が生まれるだろう。また、社会科としての認識を深めるための教師の出番を適切にしていくため、さらなる教材研究を積み重ねたり、単元の組み方を工夫したりしていく必要があると考えている。

本年度総括 仲善社研

報告者 善通寺市立西部小学校 大木 陽平

1 研究主題

人間の営みに学び，広い視野を育てる社会科学学習の展開

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

学習指導要領では，社会科の目標について以下のように示されている。

社会生活についての理解を図り，わが国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て，国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

小学校社会科の目標は，「公民的資質の基礎を養う」ことである。この「公民的資質の基礎を養う」ために，「社会生活についての理解を図り，わが国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て」ることが必要とされていると考える。つまり，

- ① 日本の国土，産業，歴史について理解させ，
- ② 社会的な見方や考え方を養いながら問題解決的な学習をして，
- ③ よりよい社会にすることができる人間を育てること

が目標であると言える。

そのためには，人間の営みに学び，広い視野を育てる必要があると考える。そこで，本年度の研究内容は，以下のように設定した。

- (1) 人間の行為に焦点を当てた教材研究
- (2) 広い視野を身につけさせる単元構成

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
4月17日	香小研仲善支部 総会	組織・運営について
6月13日	香小研仲善支部 社会科部会研修会	授業研究 6年「文化をつなぐ室町時代」 授業者 まんのう町立満濃南小学校 教諭 乗松 直樹
7月24日	香小研仲善支部 社会科部会研修会	実践発表① 5年「あたたかい土地の暮らし」 発表者 善通寺市東部小学校 教諭 小野 祐太 実践発表② 4年「火事から暮らしを守る」 授業者 まんのう町立満濃南小学校 教諭 徳増 雅俊
7月26日	香小研社会科部会 夏季研修会	提案発表 6年「文化をつなぐ室町時代」 発表者 まんのう町立満濃南小学校 教諭 乗松 直樹
10月21日	香社研定例会	授業研究 4年「香川県の発展に尽くす」 授業者 善通寺市立西部小学校 教諭 大木 陽平
11月15日	香小研仲善支部 社会科部会研修会	授業研究 3年「店で働く人と仕事」 発表者 琴平町立琴平小学校 教諭 竹森 仁志

3 研究実践について

(1) 人間の行為に焦点を当てた教材研究

乗松実践では、時代の中心人物の活躍だけでなく、民衆や地方の様子に目を向け学習を行うことで、時代というものは、中央の権力者だけでなく、地方に暮らす民衆たち等様々な人々によって動かされていることに気付くことができた。

大木実践では、景山甚右衛門と大久保謙之丞とりあげた。この二人について学習していくと、二人の各々の計画は決して一人で達成できたものではなく、互いの思いに共感し、自分にできることを協力することで、初めて実現したものであることや、後世の人たちに二人の思いが受け継がれることで、後に計画が実現したり、発展したりしていることに気付くことができた。

竹森実践では、商店街・スーパーマーケット・コンビニエンスストアで働く人の工夫や努力をもとに、自分の生活が店で働く人によって支えられていることを理解することができ、どの店も消費者の願いに合わせていることに気付くことができた。

(2) 広い視野を身につけさせる単元構成

乗松実践では、単元で学習した内容を基に、単元はじめの学習問題に立ち戻って考えるようにした。前時までに学習した資料を本時の学習問題とつなげて考えていくことで、歴史的事象を新たな視点でとらえることができた。

大木実践では、先人を複数扱い、比較する活動を設定することで、共通点からは香川県の近代化のために多方面に尽力したことだけでなく、遠い先の香川県の未来を見据えた先人の先見性を際立たせることができ、差異点からは、構想した人と実行した人といった役割分担や協力の具体に気付かせることもできた。

竹森実践では、スーパーマーケットとコンビニエンスストアについて学習した後、商店街について学習した。今も残る商店のよさを知ることを通して、商店街には商店街にしかない商品があり、それを求めて他の市や町からも買いに来ることをつかませ、スーパーマーケットやコンビニエンスストアとはまた違う商店街のよさを捉えていった。

4 本年度の成果

どの実践も、授業や単元の中で取り扱う事象を「人間の行為」としてとらえ、考えていくことで、児童の社会的事象に対する内容理解が深まった。また、以前から継続して“仲善フォーマット”を活用し、広い視野を身につけさせる単元構成を考え、実践してきた。それぞれの単元で学習しなければならない要素について、提示する資料と予想される児童の反応を1時間の授業ごとにまとめながら、単元の流れを考えることができた。

5 本年度の課題（来年度の方角性）

昨年度の実践と比較して、今年度の実践では、児童の見方や考え方の「時間、空間、立場」を広げようような手立てを意識して行うようになってきた。しかし、まだまだ十分とはいえない。今後も、授業実践を通して、授業や単元の流れの中で時間を広げて考えたり、空間を広げて考えたりする場面を設定し、それらの成否を探っていくことが必要であると考えている。

本年度総括 三観社研

報告者 三豊市立詫間小学校 片山 大輔

1 研究主題

『今』を見つめ、『未来』を拓く社会科学習の創造

－ 基礎的・基本的内容を身に付け、自ら問いを追究する社会科学習の展開 －

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

社会科の授業を子どもたちの主体的な学習、意欲を深めていく学習、そして探究することに喜びをもつ学習にする必要がある。このような学習を展開するためには、子どもたちの外側にある「ひとごと」である社会的事象を、問題解決を通じて徐々に自分に引き寄せさせ、「自分のこと」として捉えさせていく必要がある。その切り込み口こそが「問い」であると考えている。そして、その「問い」の解決に向かうことで、子どもたちの主体性が発揮されるとともに、社会にかかわろうとする意識・姿勢・構えが育まれていくものと考えている。そこで以下の3点を研究内容として取り組んだ。

① 「切実になる問い」の研究

- 社会的事象に対して矛盾や驚き等を感じ、解決したいと知的好奇心が喚起される問い。
- 問題に対する自分の考えが他者と異なり、どちらが正しいのかを明らかにしたいという問い。

② 子どもの追求意欲を高めるための教材の開発

- 学習指導要領、教科書分析、教材研究、児童の実態の分析

③ 子どもの「社会的な見方・考え方」を成長させるための工夫

- 問題解決的な学習の過程で活用する3つの観点（時間・空間・人間）、視点を広げる教師の出番

(2) 研究活動

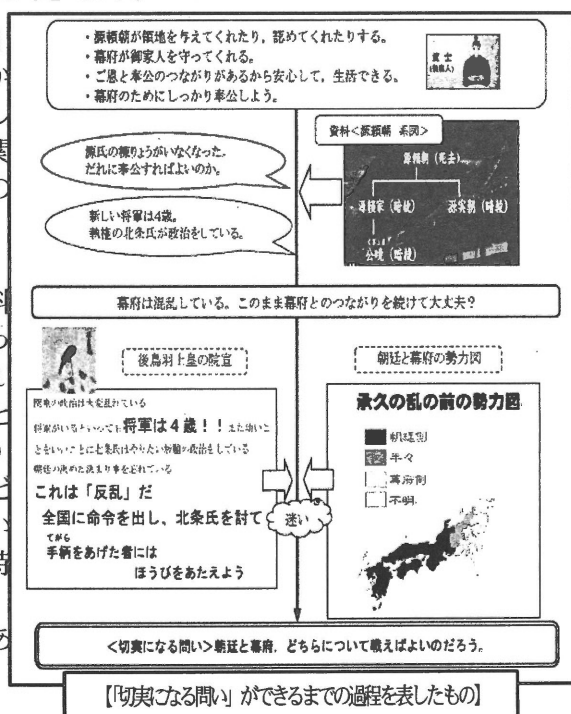
4月26日	三観小研社会科部全体研修会（役員選出・年間計画）
6月22日	三観小研社会科部研修会（授業研究）4年「電気はどこから」
7月24日	三観小研社会科部夏季研修会（香小社研分科会提案リハーサル 6年「武士の世の中へ」）
10月7日	定例研修会（提案 4年「電気はどこから」）
10月17日	三観小研社会科部研修会（授業研究 5年「自動車をつくる産業」）

3 研究実践について

① 「切実になる問い」の研究（第6学年「武士の世の中」より）

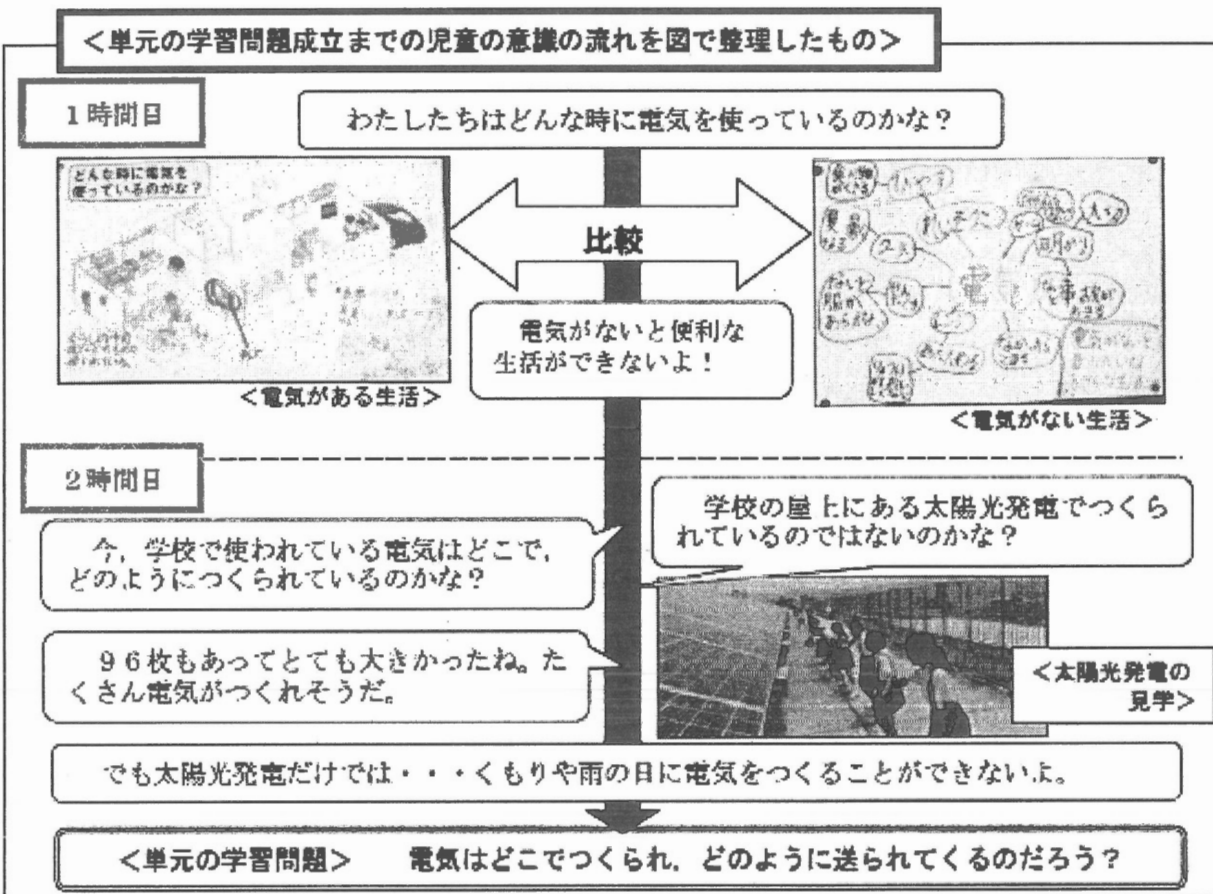
単元を通して、子どもたちは「自分が武士なら…」という視点で学んだ。前時までに、鎌倉に幕府が開かれ「ご恩と奉公」の仕組みも整ってきたことを理解している。そして、武士は幕府に従うことを誓い主従関係を結んでいったことから、武士にとって安心な世の中ができたと感じていた。

そのような子どもたちに、本時の導入段階において、頼朝の死後、源氏が三代で絶えたことを示す資料を提示した。このことは、自分たちが命をかけて従ってきた源氏の棟りようがいなくなり、「これからだれに奉公をしたらよいのか」という困惑を引き出すことになった。そこに、朝廷から出された北条氏（幕府）追討の命令や朝廷と幕府の勢力図を示すことで、子どもたちに「どちらについて戦えばよいのだろう」という迷いが生まれた。この迷いこそが、武士の立場で時代を捉えてきている子どもたちにとって、命や領地、一族の存続をかけた「切実になる問い」の芽生えであった。



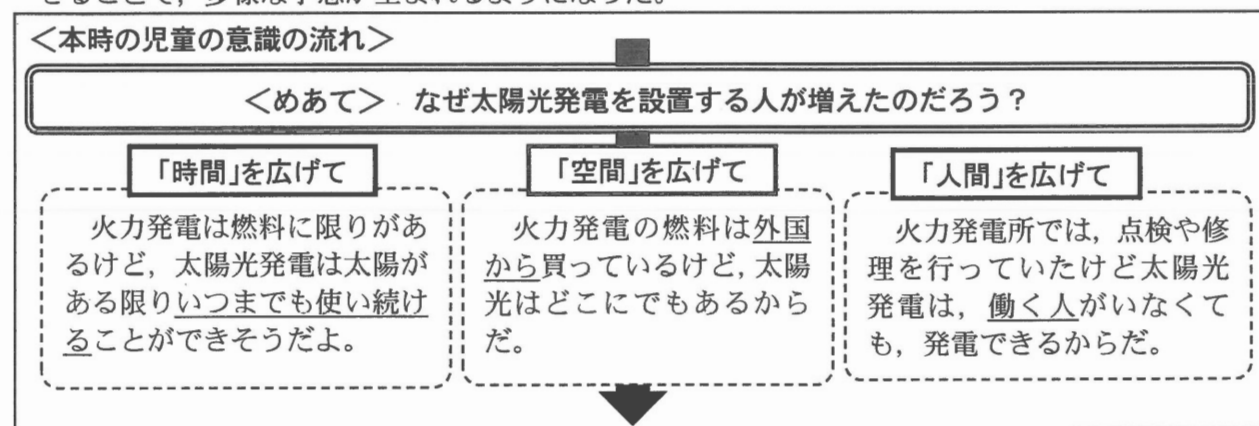
② 子どもの追求意欲を高めるための教材の開発 (第4学年「電気はどこから」より)

電気は生活に必要不可欠であるが、発電・供給の仕組みについて、不確かなことが多くあることを子どもたちは自覚した。そこで、「電気はどこでどのようにつくられているのか」や、「電気をどのように送っているのか」を調べる必要が生まれた。その追求意欲を継続し、高めるために、具体的に身近にある学校の太陽光発電を取り上げ、単元を貫く問いを成立させた。



③ 子どもの「社会的な見方・考え方」を成長させるための工夫 (第4学年「電気はどこから」より)

本時は、めあてに対する答えを「時間」「空間」「人間」の観点から予想していった。そのことで、太陽光発電の良さを多角的に捉えることができた。常に「時間」「空間」「人間」の3観点を意識させることで、多様な予想が生まれるようになった。



4 本年度の成果

- 前年度の全国大会に向けた活動を核として、ベテランと若手教員が教材のみならず理論的な内容についての話し合いをする機会が増えたことで、互いの研究意欲の高まりにつながった。
- 自主的な若年者の指導案検討の場を設けることで、研究内容を共有できつつある。

5 本年度の課題 (来年度の方角性)

- 授業研究を行う際、子どもの実態や意識の流れをより大切にして、教材の精選や単元構成を組み立てていく必要がある。1時間の学習過程は、その延長にあると捉えて研究したい。

香社研だより さ・東,小豆

<香社研テーマ>

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習
～学びの過程(何ができるようになるか)(何を学ぶか)(どのように学ぶか)を
全国大会の成果を踏まえた実践事例で探る～

<小豆社研テーマ>

社会認識を深め、社会に関わる力を育てる学習

<さ・東社研テーマ>

思考力の育成をめざした学習プランの開発
～社会科の魅力を体感し、学びを深める授業の在り方～

9月定例研 小豆、さ・東社研

日時 平成29年9月23日(土) 於:香川大学教育学部附属高松小学校 恵心館

実践提案① 第4学年 「わたしたちの県」～県の広がり～

提案者 土庄町立土庄小学校 教諭 上嶋 光晴

実践提案② 第4学年 「水はどこから」

提案者 東かがわ市立白鳥小学校 教諭 原井 和彦

実践提案① 小豆社研

1 提案の主張点

- (1) 社会的な事実が確認できるような『資料集』を提供し、調べる活動、書き表す活動の中で、知識、情報量の蓄積を図り、新たな追究課題が芽生えるような発問から、比較・関連・総合の一連の思考過程を経ることで、思考力が高められるであろう。
- (2) 調べた内容をペア学習・グループ学習の中で再構成したり、互いに発言の場を確保したりしながら吟味を進めるとともに、各自、『ミニ論文』を書き、自分の考えを表現し、伝える場を設定することで、思考力の向上に結び付いた表現力が高められるであろう。

● 主張点(1)について

① 単元全体を通して学習意欲を高める。

単元全体の学習問題を設定する段階では、自作資料集を使って香川県と周囲の県との交通のつながりを調べる。そして自分たちが住む県についてくわしく調べたいことをグループで話し合うことで、土地の利用や交通、産業について調べようとする関心意欲をもたせることができると考えた。

② 県内の特徴的な市や町について、それぞれを比較・関連付けながらとらえるようにする。

まず、地元(小豆島町)を含めた4市1町から各グループ1地域を選び、それぞれの地域の人口、面積、地元からの距離に基づく位置、特産品を調べて一覧表にまとめた。その際、人口、面積の統計資料や特産品は自作資料集から探し出し、地元からの距離は白地図上で直線距離を測って縮尺から算出する活動を行った。

● 主張点(2)について

① 全体交流での発表の定型化を図る。

全体での交流に先立って各グループの発表内容をまとめる際に、発表原稿の雛形になるワークシートを配布し、調べた結果を穴埋め式に記述して発表内容が文章化できるようにした。また、グループリーダーが司会進行役を担当するとともに、各項目の発表者や板書等の必要な役割も事前に分担することができるよう、ワークシートの構成を工夫した。

② 学習のまとめとしてミニ論文を書く。

グループ活動と全体交流から県の特徴の概要について再構築し表現するために、ミニ論文を書く活動を取り入れた。ここでは、交流活動の折に比較したり関連付けたりすることからとらえることのできる内容をキーワードにして、それらを調べた観点ごとで穴埋め文章化するワークシートを用いた。

2 討議内容

- Q. 県の特徴の概要を調べる際に取り上げた地元以外の地域は、どのように選んだのか。また、観点の1つに特産品を取り上げたのはなぜか。
- A. 単元全体の学習問題の起点には「わたしたちの県は、どのようなものだろうか」という課題追究の意識があった。特徴を調べる代表的な観点として位置、面積、人口、主な産業に絞る。主な産業については特産品に着目することで、県内各地の特徴をつかむとともに県への愛情や誇りを育む素地にできると考えた。そこで、県内8市9町のうち全国1位の生産量となる特産品の産地を選んだのが地元である小豆島町と、東かがわ市、坂出市、丸亀市、三豊市である。

実践提案② さ・東社研

1 提案の主張点

(1) さぬき・東かがわ社研の取り組み

- ・ 本研究会は、これまで地域素材を発掘し典型材と比較・分析しながら子どもの興味、関心を喚起する地域教材開発を行ってきた。また、追求の意識が途切れず、思考が連続するような学習指導の在り方を研究してきた。しかし、昨今、教師の世代間バランスが変化中、基礎的な課題にぶつかっている若年教員も見られる。そこで今年度はサブテーマとして、「社会科の魅力を体感し、学びを深める授業のあり方」を設定し、ベテラン教員の授業技術の伝承を図るとともに、新しい時代の社会科教育の進め方について研究を進めてきた。

(2) 実践提案

- ・ さ・東社研の教員の年齢構成分布を見ると、5年経てばベテランの教員の半数が退職する。10年経てば4分の3の人材がいなくなる。この実態から、これまでに積み上げられた指導技術を如何に継承するかが喫緊の課題。そこで、ベテラン教員に授業を公開してもらい、ノウハウを学ぶとともに「授業を見る目」を養ってきた。
- ・ 社会科における楽しさとは①「調べる楽しさ」と②「調べたことを考える楽しさ」と定義した。本実践では、「校内の水道管を探せ」という課題で、校内にある水道をたどり校外までの道筋を調べた。そして校内にある簡易的な浄水施設から、浄水の仕組みを学んだ。その後、校外の浄水場の仕組みを学習するという組立。
- ・ 思考を深めるための概念構築。そのためのツールとして①「取材メモ」②「取材メモを整理するワークシート」③「文章化」の3つを挙げる。調べたことについて3度考えることで概念を構築していく。①「取材メモ」には枠はなく、子どもが大切だと思ったことを書き込んでいく。見学の際、話を聞くのとメモを書くのを同時にせず、分けて行う。②「取材メモを整理するワークシート」には、取材メモに書いたことをランキング形式で整理していく。ランキングの枠に整理することで再構成が行われる。個人、グループの順に行っていく。③「文章化」では全体交流の後、キーワードを抽出し、まとめるを行う。

2 討議内容

- ・ 丸亀市も教員の高齢化が進んでいる。提案や指導案集のような資料は充実してきているが、授業を見ないと分からない部分はたくさんある。優れた授業のデータのアーカイブ化を県全体として検討してほしい。
- ・ 見学は単発で終わってしまいがち。学校の近くにある川など、繰り返し関われる資源を活用すると良い。学年を通して体験を繋いでいく。体験と思考を層にして積み上げていくという考えが大切。

3 指導・講評

○ 高松市総合教育センター 指導主事 河田 祥司様

- ・ 新学習指導要領。主体的・対話的で深い学び、カリキュラムマネジメント等いろんなキーワードが出てくる。なぜこのキーワードを大事にしようとしているのか。問題解決は「AだからBを目指す」の型になっている。Aは時代解釈、子や学校の実態。Bは目指す子や学校の姿（付きたい力など）。新学習指導要領もどんな時代が来るのか、ということで、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、技術革新というような分析がなされた。その上でどういう教育をしようか、という形になっている。移行期にはそれぞれの学校でAの部分を共有していく。Bのところにはばかり目をやったのでは、何のためにそれをやるのか、というところと噛み合わなくなる。
- ・ 小豆の提案について。AだからBを目指す。子どものアンケートから、分かっている部分は生かす。できないところをできるようにしようという組立。そこで自作ワークシート、自作資料集、発表原稿、ミニ論文シートといったものを作った。今まで全国大会を見たり発表したり聞いたりしていると、一見すると今回の提案は異質に感じる。ただ、「AだからBを目指す」と考えた時、自分が今立っている立場、小豆や学校や目の前の子どもの実態から考えるとこれは異質でも何でも無い。これが必要だと思っているから取り入れているだけ。
- ・ 大事なはこの先。授業だけの提案で終わるのはもったいない。例えばワークシートとしてどういう作り方があったのか、与え方、使い方はどうか。そこを深めてほしい。「自他で調べながら、自ら解決できる子ども」を育てたいという思いがあったから方法があったはず。では、今回の実践を分析的に振り返り、そこを提案してほしい。
- ・ さ・東の提案について。これも異質。でも、Aというのは社研の実態。こういう実態があるからなんとかしたいという提案。実態があるから、ベテランの沖先生から学ぼうという。いいものは残し、変えていけるところはどこかを分析しようとしている。もう一步の分析をこれからお願いしたい。
- ・ 2つの実践に共通していることは「概念化」。これが香社研の研究につながっている。夏季研で黒田研究部長がプラモデルで喩えて再構成の説明をした。小豆は（ ）抜きだったものを文章にし、その文章を集めてPR文にしてい。さ・東も取材メモがあり、それをまとめる補助ワークシートがあり、それを最終的に文章化していくという組立。シンプルに言うところのことだけれど、そこをもっと詳しく分析的に提案してほしい。
- ・ 全国大会の時、私は多様性ということをキーワードで提案をした。なぜならこれからの時代、多様性が大きなテーマとなる。大きな香社研のテーマの元で研究をしているが、各郡市がその実態に合わせて伝統などを生かしながらやっていける。だから香社研は強い。今日の提案もそう。自分の郡市社研の提案とか研究内容と比べるともしかしたら異質かもしれない。でも、目の前でやっている先生方にとっては他のところが求めていることとは違うことを求めているかもしれない。そういうことを提案・報告してもらい、そこに違和感を感じることが実は強みになる。それが普通になってきた時、多様性を受け入れる集団になり、さらに研究が進み始め、強い組織になる。香社研としても、小豆、さ・東の提案をどう生かしていくか考えていかなければならないのではないのか。

○ 香社研OB 佐藤 正文様

- ・ 現在、東かがわ市の歴史民俗資料館に勤務。ここには全国の市町史がある。もし、必要な場合提供できる。
- ・ 小学校三年生の社会科見学。「昔のくらし・道具」の学習。たくさん子ども達が来てくれる。それが指導要領の改訂によって変わる。歴史民俗資料館の在り方も変化が求められている。現場を離れても変化に敏感でありたい。

香社研だより 高松

<香社研テーマ>

「現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科教育」
～学びの過程(何ができるようになるか)(何を学ぶか)(どのように学ぶか)を
全国大会の成果を踏まえた実践事例で探る～

<高松社研テーマ>

「社会的な見方・考え方、生き方を育てる授業づくり」
～問題解決的実践学習で授業の日常化を目指す～

6月定例会 高松ブロック集会

日時 平成29年6月10日(土) 於: 高松市立十河小学校

実践提案 第4学年

自然災害からくらしを守る～平成16年の台風被害からこれからの地域の防災対策を考えよう～

提案授業者 高松市立十河小学校 教諭 藤澤 大地 先生

理論提案者 高松市立十河小学校 教諭 鶴羽 美緒 先生



1 提案の主張点

(1) 「課題をもつ内容」を基にした教材づくり(現代的な課題への対応)

これまで「災害」については、第4学年で火災、風水害、地震などの中から選択して取り上げ、「事故の防止」については、交通事故などの事故防止や防犯を取り上げてきた。しかし、平成32年から施行される次期学習指導要領では、第3学年で地域の安全を守る働きに関する内容として、火災と事故をいずれも取り上げることとなった。

また、第4学年の学習は地域の学習が中心であることから、関係機関すなわち県庁や市役所、警察署や消防署、消防団や地域の自主防災組織など様々な関係機関や団体、地域の人々が協力して被害を減らすために努力してきたことやこれからの災害に備えて行政が防災対策を考え、地域の人々と取り組んでいることを調べていけるようにすることが大切である。これらの調べを通して、地域社会について理解することが重要になってくる。

本実践では、育成すべき資質・能力を獲得する要素をもった現代的な課題の内容研究から授業づくりの構想を始めた。平成16年に起きた台風の被害を取り上げ、聞き取り等をもとに当時の被害について調べる中で、関係機関の連携の重要性や防災対策の変化について学習していく。そして、災害に強いまちにするための地域の防災である自主防災組織の在り方など様々な備えについて考えていくこととした。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現を目指す「問題解決的実践学習」についての研究

本単元においては、日本や香川県で起きた自然災害について地域の人からの聞き取りや被害を受けた箇所の見学を行ったり、年表や写真などから調べたりし、地図にまとめることで当時の被害の状況についてイメージできるようにした。第2次では平成16年の台風の際、地域や市、県の人々がどのように活動していたのかを調べ、対処の様子を時系列の表にまとめたり、関係機関の防災体制を関係図にまと

めたりする。第3次では、関係機関の災害対策の変遷について、年表や資料から調べたり四国地方整備局や県土木事務所の方の話を聞いたりして調べ、現在の関係機関の防災体制を関係図にまとめる。社会的な見方・考え方を働かせて、空間的な広がりや時間の経過、事象や人の相互関係に着目して考えを広げていく。そして、当時と現在の防災体制を総合的に比較し、よくなったところや課題を明らかにすることを通して、これからの対策について考えていく。

(3) 本時の思考操作

本時では、これまでの学習によって習得してきた県や市、地域の防災体制の変遷をもとに、平成16年当時と現在の防災体制を比較したり関連づけしたりして考えることを通して、平成16年に起きた台風に対して現在の体制で対応できるかを考える。第3次で調べた防災対策の変遷をふまえて思考し、第2次で作成した時系列の表によくなった点や課題を書いた付せんを貼り、話し合いながらよくなった点や今も残る課題についてまとめていく。

2 討議内容

- 前時まで、空間・時間的なつながりについて、関係図を使った思考を行っていたことが本時にも生かされていた。
- グループで考える際に、教師が前もって支援をすることができていた。
- 県・市・地域の取り組みを色分けすることで、思考を整理し、深まった課題に迫ることができた。
- 風水害への対策という問題の中でも、自主防災組織への参加率という現代的な課題を見出している。
- △ 防災対策に取り組む地域の方の話から、さらに危機感をもって深まった課題をもてるとよい。自治会への参加率が低いという現状を掘り下げて、次時以降、学習を深めていきたい。
- △ これまでに学習した足跡の中でも、本時にかかわるキーワードを目立たせる掲示になれば、より話し合いが活発に行われたかもしれない。
- △ 子どもの、「もし、また浸水したら」という発言などを広げて、危機感につなぐことができるとよい。

3 ご指導

高松市総合教育センター 指導主事 河田 祥司 先生

新学習指導要領では、過去に県内で実際に起きた自然災害を取り扱うこととされている。本単元では十河地域に実際に大きな被害をもたらした16号台風を取り上げ、緻密に単元が構成されていた。今後は目の前の子どもの発言を拾い上げ、議論させることによって子どもが作る授業を目指すとともに、思考操作などの方法に習熟していくことが期待される。

高松市総合教育センター 研修指導員 香社研 OB 池田 孝徳 先生

正解を求めすぎず、できる限り子どもの言葉を大切に授業が展開できていた。子どもの言葉の中に根拠が含まれるようにするため、未来を予見しうる形で過去の諸事実の意味を読み取り、お互いに情報を出し合いながら学習を進めていくことが大切である。

香社研だより 坂・綾

<香社研テーマ>

自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る学習

<坂出・綾歌社研テーマ>

主体的にかかわりながら追究する社会科学習の展開

—対話の活性化を図る单元構想の工夫—

12月定例会 坂出・綾歌支部

日時 平成29年12月9日(土) 於:坂出市立坂出小学校

実践提案 第4学年 工場の仕事

提案者 坂出市立坂出小学校 教諭 岡野 敏英先生

綾川町立昭和小学校 教諭 網野 未来先生

1 提案の主張点

(1) 思考ツールを活用し、対話の活性化を図った单元構成の工夫

第2次の最後に、子どもたちがばらばらに持っている工場の工夫についての気づきを、4人のグループでKJ法を使って分類させることで共有させた。KJ法による話し合い活動を通して、工場が大切にしているものを、「安心・安全」、「おいしさ」、「客の好み」、「はやくたくさん」などに分類できた。全体交流では、『『おいしいうどんを作る工夫』以外にもたくさんの工夫があることが分かった。』等の意見が出た。また、「工場では、どれに一番力を入れているのか知りたい。」といった、次時につながる意見も聞くことができた。

(2) 昨年度実践の課題をもとにした指導の改善

昨年度、坂・綾教科研において「工場の仕事」の授業実践を行い、その討議会やご指導において様々な意見をいただいた。昨年度の課題をもとに、次の3つに重点を置いて指導の改善を図った。

- ① 根拠をもった話し合いができるようにするための支援
- ② 「安心・安全」の意味をしっかりと考えさせるための支援
- ③ 話し合いの支援

(3) 学びのつながりを意識した指導計画

低学年では、遠足で食べるおやつのお買い物体験や町体験によって、決められたお金で買い物しなければならないことや、身のまわりにはたくさんの商業施設があることを学ぶ。3年生では、聞き取りや見学などの体験活動を通して、食品工場では、衛生的な環境で、安心・安全な製品作りを一番に心がけ、

お客さんのニーズに合わせて様々な商品を開発していることを学ぶ。ここから、実生活の中でも、食べ物を大事にしたり、自分の食生活を見直したりすることにつなげていく。そして、高学年の家庭科において、目的に合った品質の良い物や、安全面に配慮された物を無駄なく購入することができる児童の育成につないでいきたい。

2 討議内容

討議では、ランキングツールを使う必然性や単元で扱った日の出製麺所、見学や他工場のビデオ映像の利用などについて質疑応答が行われた。ランキングツールについては、ダイヤモンドランキングは、子どもから出た言葉を用いているため、並んでいるお客さんに「どうしてこのお店に来ているのですか？」など聞いてみることも大切。インタビューしたことを、シールや付箋に書いて、ダイヤモンドランキングに貼っていく。そうすることにより、消費者の立場から検証できたり、店側の立場から予想したりすることもできる、という意見もあった。日の出製麺所に関しては、行列は「おいしさ」、「安心・安全」とはズレがある場合もある。いろいろな店に出しているということが日の出製麺所の特徴であるから、これを紹介し、深めていくこともできるのではないかと。1つのことが深まり始めて、深い学びにつながっていく。クラスとして意見を束ねつつあるが、一人ひとりの考えを大事にしたい。という意見もあった。見学や他工場のビデオ映像の利用に関しては、メディアの影響というものが、今後の研究にも入ってくると思う。子どもが、「テレビで見たから。」と答えた時に、我々はどうすれば良いのか、ということについても、考えていかなければならない、という意見もあった。

また、研究主題（3）に関しては、児童の予想から学習計画を立て、子どものわかりやすさに応じて進度を変えることができ、具体から抽象へ、抽象から具体へという流れもあり、単元構成が工夫されている、という意見もあった。

3 ご指導

まんのう町立満濃南小学校教頭 佐柳 先生

うどんは、産業・歴史の面から見ても、子どもにとっても生活実感のある教材といえる。今回は、昨年度と比べると、対話の活性化を旨とした教材の更新をしており、前回よりレベルアップしていた。

KJ法は、類別する上で大切であり、ランキングはKJ法のステップアップとして位置づけることができる。「早く、たくさん」については、お金もうけにもつながってくるため、意味合いが変わってくる場合がある。「どうしてこれが一番なの？」という根拠を示すために、ランキングを発表するのと並行して、子どもが考えた根拠を図にまとめたら良かった。こうすることにより、商品を通してお店と客との間に信頼関係があることに気付かせることができ、さらに深い学びへとつながっていく。

坂出市郷土編纂所所長 唐木裕司先生

岡本先生が授業をする際に、計画を立てた時から授業は始まっている。見せて、結論を出すのではなく、根拠、意見といった過程を重視した授業をつくっていく。多面的・多角的な視点から、教材を捉えていきたい。そのためには、副読本の作成・更新を積極的に行ってほしい。フィールドワークもどんどんしてほしい。「坂出には、塩作りの痕跡がない。」と思うが、塩竈神社など、きちんと見ればある。常に動いて、教材研究をしてほしい。見える授業にして、子どもたちと一緒に教材研究を行ってほしい。

香社研だより 丸亀

香社研テーマ

「現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科教育」

～学びの過程(何ができるようになるか)(何を学ぶか)(どのように学ぶか)を

全国大会の成果を踏まえた実践事例で探る～

丸社研テーマ

自立と共生を育む社会科学習

7月定例会 丸亀集会 平成29年7月8日(土) 於：岡田コミュニティセンター

＜実践提案＞ 丸亀市立城西小学校 池田 和樹 先生

3年「はたらく人とわたしたちの暮らし 農家の仕事」

1 主張点

児童一人ひとりが課題解決に向かって主体的に追究できるよう、社会的事象との出会わせ方を工夫し、人との関わりを中心とした体験的な活動を学習過程に効果的に取り入れることで、社会事象の意味を考え、学び合う楽しさを感じ得る授業を展開する。

2 本単元での取組

(1) 主体的な追究をめざした地域教材の開発

①導入段階での社会事象との出会わせ方の工夫

授業の導入時に、丸亀市の特産物を調べ、丸亀市ではたくさんの農作物が育てられていることを知った。その後、香川県の有名な物としてうどんを挙げ、ねぎが使われていることに着目させた。児童も食べる機会があるうどんを提示したことで、そこで使われるねぎへの関心も高まったと考えられる。さらに、これから調べたことを家の人に伝えることを目標にすることによって、学習問題が価値あるものとなり、児童の学習意欲も高まった。

②人との関わり方を中心とした学習展開

見学先として地域にある尾野農園を選んだ。尾野農園では、実際に施設の中を見学し、作業している様子を見たり、説明を聞いたりして実際の現場について知った。

観点をもって見学し、見つけたことや聞いたことをワークシートに記入し、学校に帰ってからグループで交流して全員で情報を共有した。



(2) グループでの話し合いを充実させることによって、児童の思考を深める。

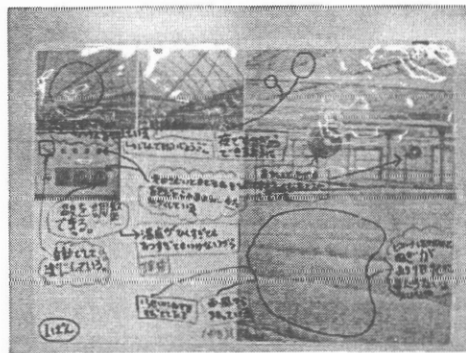
①本時までの学び合い

見学したことを観点別(土づくり、農業・安全、機械・手作業)に分析・整理を行った。グループで観点ごとに見つけた工夫が何のための工夫なのか考えたり、写真をもとに考えたりすることで、これらの工夫が「おいしくて安全なねぎを作るための工夫」であることを理解した。

②「ホワイトボード」(まなボード)を活用した本時の学び合い

本時は、授業の導入時に尾野農園のねぎが使われているうどん屋を紹介し、1つのねぎは3回しか収穫できないというこれまでの学びと1年間出荷し続けているといううどん屋さんの発言との「ずれ」をテープ図を活用して意識させるとこで、1年間出荷できる工夫を考えるという学習問題へと意識を流していくことができた。

1年間出荷できる工夫を見つけるための資料を4枚用意し、グループごとにどの資料で読み取りを行いたい決めて、工夫を探していった。グループの仲間と協力してどんどん書き込み、活発な活動が行えていた。



3 討議内容

(1) 主体的な追究をめざした地域教材の開発

- ・地域にあるので何度も行ける。教師の熱意を感じる。尾野農園が法人化しているのも良い。
- ・見学に行くことで子ども達はネギの面白さに引き込まれていったのだろう。本時で再構成がある授業。こどもの弦きからも子ども達がネギの魅力を味わっていることがわかる。
- ・校区にある題材を選んだことが「地域に開かれた」に合致する。最初は教師主導でもいい。学習を深めていく中で意欲が生まれてきてもいい。3年生の社会は自分の生活を通して社会を見ることが大切。
- ・見学の時期。主体的というのであれば、まず真っ白な状況で見学に行き、その後で疑問が出てきたら再度見学に行くという流れでも良かったのではないかな？

(2) グループでの話し合いを充実させることによって、児童の思考を深める。

- ・深い認識と浅い認識の差は？そこがぶれている。条件整理が必要。1年間ネギがあるのはうどん屋？スーパー？出荷ならその証拠となるものが必要。ネギの小中大の写真から時間軸は見える(見学では時間軸は見えない)。見えるものをもとにして見えないものを考えていくことで課題解決学習が成立する。
- ・良いところは「ネギ」。下校途中にあるので身近。しかし、子どもにとって身近になっていたのか。子ども達が話し合いの時に、自分たちの考えを持っていたのか。「共生」はできたが「自立」できていたか。

4 ご指導 高松市教育センター指導主事 河田祥司先生

社会参画 実行から入るのは「参加」計画から入るのが「参画」。子どもがしっかり計画を立てないと参画にならない。本単元でこの第1次(企画の段階)は大切にすることが必要。

教材の価値 「とる→出荷する」から「契約→出荷する」これは農家が1番嫌うやり方。

- ・質が保証できない。・・・どのように質を？
- ・量が保障できない。・・・どのように量を？
- ・人材が保障できない。・・・どのように人材を？

これらの農家の努力や工夫を第2次で扱うことができています。

主張点 気づかせるためには比較・焦点化がある。比較は写真の日付でも可能。これによって、子どもの思考は「ネギは3回しかとれない」から「1年中ある。つまりずらして育てるんだ!」となる。

指導講評：丸社研元副会長 香川佳和先生

- ・子ども達が楽しんで授業をしている。社会科好きな子が育っている。

香社研だより 仲・善

<香社研のテーマ>

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習

<仲善社研のテーマ>

人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学習の展開

10月定例会 仲善ブロック集会

日時 平成29年10月21日(土) 於:善通寺市立西部小学校

実践提案 第4学年 郷土の発展に尽くす

「香川県の発展に尽くすー香川県の未来を見つめてー」

授業者 善通寺市立西部小学校 大木 陽平

提案者 琴平町立琴平小学校 竹森 仁志

1 提案の主張点

(1) 二人の先人を取り上げることで、先人の業績は思いを共感した他の人の協力があって初めて成し遂げられたものであるということが理解できる。

本単元では、香川県初の鉄道を敷設した多度津の先人である景山甚右衛門と、四国4県を結ぶ幹線道路を整備した財田の先人である大久保謙之丞の二人の先人を取り上げる。

景山甚右衛門一人でも様々なことが見える。彼の一生を見ていくと、反対運動で命の危険にさらされながらも、自分の意思を貫いたのはなぜか考えることで願いや努力・苦心が分かる。鉄道の開通を調べていくと、人々のくらしの変化などが見える。また、鉄道だけではなく、銀行や電力会社をつくったという事実から、現在の私たちにまで関わる、香川県の発展のために尽くした人だと分かる。

これに大久保謙之丞を加えると、何が見えるのか。ここに二人の先人を扱う価値がある。それは、現在の社会が一人の先人の働きによってつくられたものではなく、様々な人の思いや願いがつながってつくられたものであると気づくことができることである。

そのため、本時では中心資料として、大久保謙之丞が景山甚右衛門に宛てた手紙を扱った。前時までに、年表から寄付をしたことや、讃岐鉄道の開通式でお祝いの言葉を述べたなど、二人が関わっていたことは見えている。しかし、この手紙を出した意味を、年表を手がかりに考えることで、長年病気で苦しんでおり、自分が死んだとしても、この事業を受け継いでほしいという大久保謙之丞の思いや、その思いに共感した景山甚右衛門の姿が見えてくる。香川の発展を考え、鉄道を開通させるなど実行力があり、お金もある景山甚右衛門になら、自分の夢をたくせると考えたとしても不思議ではない。そして、大久保謙之丞の死後、四国新道が完成したことによって、大久保謙之丞の思いが景山甚右衛門によって受け継がれていることに気づくことができる。

このように、同じ時代に生き、同じような考えをもった二人の先人を扱い、関連させることで、現在あるものが一人のスーパーヒーローによって成し遂げられたものではなく、同じような考えや思いをもった人との協力があつたからこそ、初めて成し遂げられたものであると気づくことができる。また、2人の死後も香川用水や瀬戸大橋が完成しているという事実から、大久保謙之丞から景山甚右衛門だけではなく、景山甚右衛門から後も、先人の志が伝わり、維持・発展していると気づくことができると思う。

2 討議内容

- 先人の思いが現代にまでつながっていることが見える本時であった。あえて二人の先人を扱うことの意義がわかった。
- この単元は、社会科の基本である「人の営み」がよく見える単元である。本時では、大きなことを成し遂げた二人の先人がつながることで、先人達の業績や思いが現代にまで受け継がれ、維持・発展しているという、歴史的な見方も養うことができる。
- 「二人の先人の思いがつながり、受け継がれている」という、新たな視点が見える本時だった。景山甚右衛門を扱いながら大久保謙之丞が登場するというような、軽重をつけて単元を構成していくと、そのねらいがより明確にわかるかもしれない。
- 児童は、学習問題を解決するために、年表を手がかりにして調べていた。しかし、前時までの学習で使われた年表がノートの別々のページに貼られていたため、二人を関連付けられず、別々に調べていた。隣同士に貼ることで、はじめから二人を関係させながら考えることができたはずである。
- 提示された手紙から、「受け継がれている」ということが本当に分かったのだろうか。児童がもっと対話をし、思考操作をしていく展開をするのもよいかもしれない。
- 時間がきても資料を読んでいる児童がいたように、資料をもとに考える児童が育っている。だからこそ、本時の最後で、資料を調べてわかったことをもとに何を考えたかを、一人ひとりノートに書かせ、それを交流させることが必要だった。そうすることで、さらに学びが深まっていく。

3 ご指導

琴平町立象郷小学校 教頭 山内 秀則先生

- ・ この単元で教えるべきことは、先人の苦心と努力である。本単元では、二人の先人を扱い、その二人がつながると、先人の苦心や努力が見えてくるという流れになっていた。では、先人の思いが受け継がれてきた先にいる児童は、「自分も含まれる」という思いになっていたか。今と昔をつなぐことで、その間にいる人についても見えてくる。「300年かかるものでも、思いがつながれば実現できるかもしれない」という思いを育てることが、この単元で二人の先人を扱う価値ではないだろうか。
- ・ 本時では、大久保謙之丞が景山甚右衛門に宛てた手紙が新たな資料として提示されたが、教師が読むという音声情報のみだったので、児童の予想の根拠になり得ていなかった。紙芝居にするなど、より見える形にして提示し、児童が考える土台をつくってあげなければならない。また、児童が予想する段階で、本時の終盤に行った二人の先人の年表を合わせることをしていれば、予想の根拠が明確になったのかもしれない。

香社研だより 三・観

香社研テーマ

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習
～学びの課題（何ができるようになるか）（何を学ぶか）（どのように学ぶか）を
全国大会の成果を踏まえた実践事例で探る～

三観社研テーマ

『今』を見つめ、『未来』を拓く社会科学習の創造
～基礎的・基本的内容を身に付け、自ら問いを追究する社会科学習の展開～

10月定例会 三観ブロック集会

日 時 平成29年10月7日（土） 於：マリンウェーブ

実践提案 第4学年「電気はどこから」

授業者 観音寺市立観音寺小学校 教諭 白川 康太

提案者 観音寺市立伊吹小学校 教諭 守屋 顕

1 提案の主張点

(1) 実践提案①（観音寺市立伊吹小学校 教諭 守屋 顕）

① 主張点

- 1 子どもの追究意欲を高めるための教材の開発
- 2 切実になる問いの成立にむけて
- 3 子どもの「社会的な見方・考え方」を成長させるための工夫

(2) 学習指導要領より

次期学習指導要領には、電気はどのようにつくられ、送られているかを調べ、発電・配電・変電・送電に関わる多くの人々の工夫や努力によって、どんな時でも電気を使い続けることができる社会の仕組みを捉えることが示されている。

(3) 教材選定の理由

① 電気の現状

- ・ 日本の発電は、資源の確保という大きな課題がある。
- ・ 将来にわたる持続可能な発電を求めて、ベストミックス案が政府によって考えられている。
- ・ 電力会社に加え、民間企業や各家庭といった「民」の力が電力を支えるようになっている。

② 学ぶ価値

- ・ 消費量の増大、燃料の高い海外依存度といった課題があり、現状のままでは持続可能性が低い。そのため、未来も電気を使い続けるためにどうすればよいか考える必然性がある。
- ・ 国内にとどまらず、外国との関係にまで視野を入れたライフラインの在り方を考える子どもを育てることができる。
- ・ 持続可能性という視点から課題があり、課題を解決する唯一の答えはないという現実から、自分たちの最適解を求めようとする協働的な学びが生まれる。

2 実践提案②（観音寺市立観音寺小学校 教諭 白川 康太）

(1) 子どもの追究意欲を高めるための教材の開発

① 教材化に向けた社会的な見方・考え方の整理

電気の利用という社会的事象を、時間・空間・人間といった観点ごとの見方・考え方に整理することは、学習内容を明確にし、教材化を図るために有効であった。

② 子どもの追究意欲を高めるための工夫

子どもたちの身近にある電気について、知っていることと知らないことを整理する。生活現場から上流にある放送電現場へ視点をさかのぼるにつれ不明確なことが増えてくる。このようにして、生活の中で当たり前のように使い、自明だと思っていた電気について、多くの疑問が生まれ、共有されることを通して、子どもたちの追究意欲が高まった。

(2) 切実になる問いの成立にむけて

① 単元における切実になる問いの成立

まず、今の生活でどのような時に電気を使っているのかを生活経験から想起させ、くらしの中の

ほとんどのものに電気が使われていることを確認する。次に、電気がもし使えなくなったら、どのような生活になるのかを考えさせる。このことから、今まで考える機会がなかった電気についてもっと知りたい、調べたいという追究意欲をもたせる。そして、どんなことを調べたいかを共有し、焦点化させ「電気はどこでつくられ、どのように送られてくるのだろうか？」という単元を貫く問いをもたせた。

② 本時における切実になる問いの成立

前時の学習では、「太陽光発電は、不安定な発電だ」ということを学んだ。本時の資料は、「香川県では太陽光発電が増えている」ことを示している。既習事項と本時の資料とは、矛盾しているようにも見える。そこから、「なぜ太陽光発電を設置する人が増えたのだろうか。」と問いをもち、子どもが解き明かしたいと考えるに至ったのである。

(3) 子どもの「社会的な見方・考え方」を成長させるための工夫

- ・ 見通しをもつ段階での観点(「時間」「空間」「人間」)の活用

＜授業の実際を映像で見る＞

火力発電所と比べて、太陽光発電の良さを考えるために、一人の児童の発言を取り上げ、予想を考えていった。「将来のために」(時間を広げて)、「働く人が」(人間を広げて)などの観点から話し合っていた。

空間を広げて考えられるように、資料を提示し、太陽光は燃料を外国に頼らないことをおさえた。

3 質疑・応答(質問は(質)、応答は(答))

- (質) 自宅にソーラーパネルを設置している子どもの数や、ソーラーパネルを設置した理由についてインタビューをしたのか。
- (答) ソーラーパネルを設置している児童は、30人中10人いた。インタビューは特に実施していないが、児童のつぶやきでは環境面について話していた。
- (質) 本時の問いの答えは、「再生可能エネルギーは太陽の光など、自然の力で電気をつくっている。将来もずっと電気をつくり続けるためには、その発電の量を増やしていかなくてはいけない。」で良いのか。未来の人のことを考えて設置数を増やしてきたという考えにはならないのではないか。
- (答) 確かに経済面のことはある。しかし、教えたことは太陽光発電のもつ持続可能性だ。
- (質) 本時では、何が切実になったのか。
- (答) 児童が思っていることと、現実のこととのズレで、児童の不思議に思う気持ちを育てた。
- (質) 振り返りを出した意図は何か。
- (答) 前時とのつながりを大事にしたかった。
- (質) コンセプトマップを使ってみて感じていることは何か。
- (答) 見方、考え方は、授業のツールとしては使えているし、授業づくりのために使っている。これらが子どもの中で成長しているかは課題だ。
- (質) 2030年のベストミックスにおいて、太陽光は4%しか増えていない。こちらの方が「なぜ？」という意識になるのではないか。
- (答) 児童は、火力発電は安定して発電できることを知っているから、今回のような流れにした。

4 指導(西部教育事務所 主任指導主事 林 聖士)

(1) 教材について

- ・ 社会科は時代の流れと共に、学ばせたいことが変わっていく。
- ・ 水は命に関わるものだから地方公共団体が責を負う。一方、電気はなくてはならないものだから企業が供給している。

(2) 授業の主役は児童

① 学びの必要感

- ・ 学習問題は生まれるもの。
- ・ 教師は生まれるように手立てを打つ。
- ・ 学習問題について「？」が付くと、児童は学びの解決に向けて意欲が湧いてくるだろう。

② 教師のしかけ

- ・ 教師が仕切るのか、しかけるのか。
- ・ 児童がおもしろい、不思議だと思うことを引き出す。児童にどんどん話をさせる。
- ・ 教えたことをぐっところえて、気づかせていきたい。

③ 授業のつながり

- ・ 自分たちとの関わりという視点があればどうか。
- ・ 太陽光は○で、火力は×という見方にならないように、バランスが大事だ。

5 講話(観音寺市教育委員会学校教育課 課長 柴田 英明)

- ・ 問いの研究の背景
- ・ 追究意欲を生み出す問いづくり ー小さな問いから大きなねらいへー
- ・ 教材研究における「わくわくどきどき」感動体験

香社研研究フォーラムカップ2017

【改変の趣旨】

今年度はフォーラムカップの進め方を大きく変更しました。

フォーラムカップということで過去4回、各ブースに分かれてのポスターセッション方式により実施してまいりました。結果、各郡市提案者のプレゼン力は向上し昨年度の全国大会での素晴らしい発表につながったと考えています。ただ、問題点としては提案発表を聞けない郡市があるということがありました。そこで、今年は全郡市の提案をじっくりと聞く場を設定しました。今回はじっくりと聞き、評価をすることに重点を置いた研究フォーラムにしたいと考え実施いたしました。

【日程】 2月24日(土) 12:30～

○ 開会行事

- ・会長あいさつ(高松市立太田小学校 亀井伸治校長先生)
- ・カップの返還
- ・研究フォーラムの進め方

○ 実践交流 13:00～16:10

- ・高松北社研「ごみの処理と利用」
高松市立新番町小学校：池田 沙也香



高松北社研



丸亀社研

- ・丸亀社研「自動車をつくる工業」
丸亀市立城坤小学校：藤井 隆法

- ・さ東社研「水はどこから」
東かがわ市立白鳥小学校：原井 和彦



さ東社研



高松南社研

- ・高松南社研「明治の国づくりと人々の生活」
高松市立鶴尾小学校：日下 浩子

- ・坂綾社研「工業に携わる人々の思いに迫る
～ある中小企業が取り組んだBCPから考える～」
宇多津町立宇多津北小学校：西尾 佳奈



坂綾社研



仲善社研

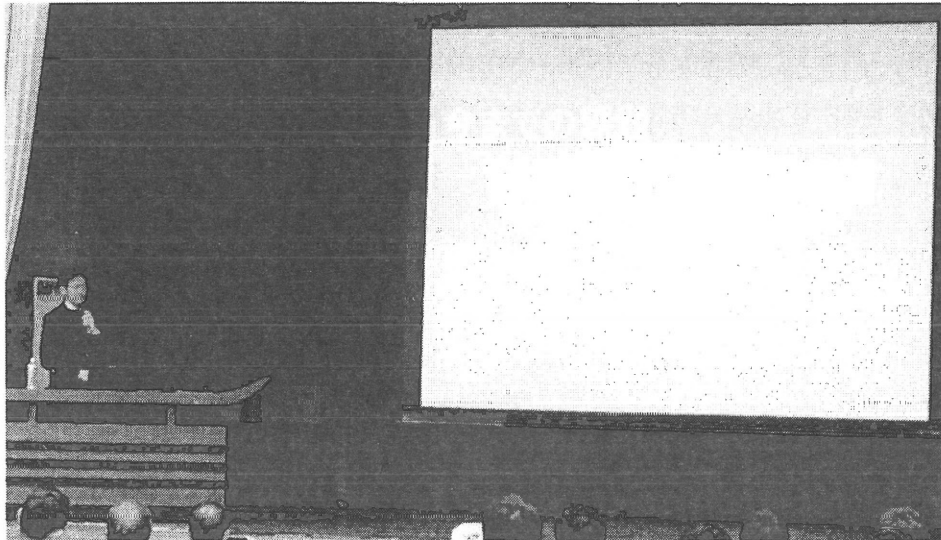
- ・仲善社研「オリンピック開催を夢見て
～生まれ変わった日本～」
善通寺市立筆岡小学校：尾崎 純一

・三観社研「私たちの生活を支える自動車 ～自動車をつくる工業～」

三豊市立勝間小学校：矢野 勝裕

○ 研究部より「本年度の総括と次年度構想」

(附属高松小学校 黒田拓志)



三観社研

○ 閉会行事

・結果発表(三豊市立上高野小学校校 安藤通校長先生)

・表彰

ゴールドカップ：坂綾社研

シルバーカップ：高松南社研

・副会長あいさつ

(小豆島町立星城小学校校長

羽座則史校長先生)



【成果と課題】

過去4回のフォーラムカップに比べ、派手さはなかったものの、参加者がすべての提案発表をじっくりと聞くことができたのはよかったと思います。どの郡市の提案も各郡市の日々の積み上げを感じられる素晴らしいものでした。

課題は、評価シートでした。まず、項目に沿った発表内容にしておかなければ、評価されないという点です。評価項目は早めに各郡市に示しておく必要があったと思います。また、8項目で評価しましたが、その項目数が妥当だったのかも検証していかなければいけないと思いました。集計をして感じたことですが、自分の出身郡市に対しての評価も様々だと感じました。満点評価、逆にとても厳しい評価と・・・あのオリンピックの競技でさえ満点評価が出ることは稀です。どんな実践でも完璧なものはありません。課題を見つけ指摘する目も評価には大切なのではないのでしょうか。次回のフォーラムカップは附属高松小学校での開催になります。今年以上に「表現する力」「評価する目」が鍛えられる会になればいいと思います。提案された先生方お疲れ様でした。

